『あられもない貴婦人』

作　矢内文章

『あられもない貴婦人』

登場人物

美奈子　サロン貴婦人の売春婦。戦争未亡人。
絹江　サロン貴婦人の売春婦。
文子　サロン貴婦人の売春婦。戦争未亡人。
年子　サロン貴婦人の売春婦。戦争未亡人。

岩崎義男　サロン貴婦人の経営者。
和子　義男の妹で、サロン貴婦人の世話係。
青木　刑事。
ユウジ　靴磨きの少年。
小茂田　サロン貴婦人の常連客。文子に惚れている。
丹羽　投資家。

舞台

昭和２５年７月。東京。
瀟洒な洋館風建物「サロン貴婦人」の裏庭が主な舞台。

その裏庭には井戸と小さな地蔵があり、室内からの明かりに照らされている。
舞台上手のトタン板で仕切られた一区画は汲み取り式便所で、女性は井戸で水を汲んで用を済ます。

プロローグ

ジャズが流れ、美奈子、文子、年子、絹江、和子が嬌声とともに登場。
音楽に合わせダンスしながらのランウェイ・ウォーク。

絹江　こんばんは、いらっしゃいませ！
文子　また会えました！
年子　待っていたわ～！
美奈子　さあ、踊ってください！
和子　い、いらっしゃいませ。

などなど、サロン貴婦人の忙しい様子を表すイメージシーン。
踊りながらそれぞれの位置に着き、シルエットとなる。
シルエットからそれぞれ動き出し、次の場面となる。

1―1

ある日の夕暮れ。
ヒグラシが鳴いている。
裏庭に置かれた粗末な椅子と瓦礫のような庭石に腰掛け、ドレス姿の文子（あやこ）と年子がうどんをすすっている。

年子　贅沢になったわ。
文子　え？（すすっている）
年子　贅沢になった、私たち。

文子　なんでよ？
年子　だって、文子さん、うどんよ、これ。
文子　うん。うどん。
年子　お仕事前の腹ごしらえが、うどん。
文子　おいしいわよね。私、楽しみなの、この時間に食べるうどん。
年子　贅沢になったわ。
文子　なあに？　贅沢は敵だって言いたいの？　戦争はとっくに終わったのよ。
年子　そうじゃないわよ。
文子　食べないならちょうだい。（と箸を伸ばす）
年子　やめてよ。食べるわよ。（急いですする）
文子　もう、年子さん変よ。
年子　だから、変わったって言いたいのよ。ちょっと前まではすいとんだったでしょ？
文子　ああ、止めて頂戴。すいとんの話は止めて。
年子　なんでよ。戦時中はみんなすいとんだったでしょ。むしろご馳走だったじゃない。
文子　（無視して）あー、おいしい。贅沢は敵だなんて誰が言ったのかしら。（盛大にすする）
年子　…すいとんも好きよ、私。
文子　もう！　やめてよ、年子さん。
年子　だって、おいしくなったわ、すいとんも。
文子　最近のはね。闇市がマーケットになってからでしょ。
年子　そうね。戦時中の配給はやっぱり小麦粉が悪かったのね。
文子　やめてよ。厭なの、思い出しちゃうのは。
年子　そうね…。
文子　毎日毎日、すいとんすいとん。生煮えでぐちゃぐちゃのすいとん。それから雑草、藁…。厭だったなあ。
年子　戦時中だったんだもの。仕方がないわ。
文子　腹が減っては戦はできぬ。あんなもの食べていて勝てるわけないわ。

年子　そりゃそうだけど…。
文子　腹が減ってるから、竹槍でＢ２９を落とそうなんて考えるのよ。
年子　あら、私、けっこう本気だったわ。
文子　本当？　馬鹿みたい。
年子　…馬鹿みたいだったのかしらねえ。
文子　軍人さんだったからよ、ご主人が。
年子　ああ…。
文子　お手本にならなきゃって頑張ったのでしょ？　年子さんのことだから。
年子　…５年経ったのね。今考えると不思議。本気だったのだから。
文子　私はお腹のなかで舌出してたわよ。
年子　そうなの？
文子　そりゃそうよ。年子さんみたいな人がいたから大っぴらにはできなかったけど。
年子　腹黒いわね、文子さん。
文子　黒くないわよ、舌出してただけ。お腹のなかで。早く終われって思ってた。
年子　…文子さんのご主人も南方だったわね？
文子　ガダルカナル。
年子　そう。うちはニューギニア。
文子　遠いわねー。
年子　遠いわよー。南半球だもの。
文子　気が遠くなるわ。なんだってそんなところまで行ったのかしら。
年子　まあ、いろいろあったんでしょうけどね。
文子　いろいろってなによ。いろいろで死なされたんじゃ、たまったもんじゃないわ。おかげでこっちは流れ流れて、こんな…。
年子　…。（盛大にすする）
文子　…。
年子　…。やっぱりうどんがいいわね。

文子　（盛大にすすって）さ、腹が減っては戦はできぬ。今夜も出陣じゃ。
年子　文子さんたら。

２人が笑いあうところに、絹江が来る。
乱れたドレス姿。井戸から水を汲み、便所に入る。

文子　ねえ。絹江さん、もうお客取ったみたい。
年子　また。ちょっとやり過ぎだわね。
文子　いやだあ、私たちまで価値下がっちゃう。
年子　そうよね。
文子　そうよ。これでも貴婦人なんだから。（どんぶりを乱暴に置く）
年子　そうね。ちょっと意見してくるわ。
文子　え、よしなさいよ、年子さん。
年子　いいのよ、文子さん。これ以上、絹江さんに好き勝手されたんじゃたまらないわ。
文子　でも…。
年子　大丈夫よ。任せて。

年子は便所の前に行く。

年子　（便所に向かって）絹江さん。ちょっと、絹江さん！

便所の中からトタンの壁が激しく叩かれる。
顔を見合わせる年子と文子。
美奈子が姿を見せる。

（美奈子に気がつかず）絹江さん！　話があるのよ、絹江さんったら！
年子　やめなさいよ、そんなこと。
美奈子　美奈子さん！　だって聞いてよ。絹江さんたらまた時間前にお客取ったのよ。
年子　そう。
美奈子　そうって、美奈子さん。困るじゃない。ねえ、文子さん？
文子　そうねえ。
美奈子　だったら、あなたたちもすればいいじゃない。
年子　いやだわ、そんなの。ここは「サロン貴婦人」なのよ。私たちはあくまでも貴婦人。パンパンとは違うわ。
美奈子　違うの？
年子　ち、違うわよ。
美奈子　誰彼構わず売ってるじゃない、私たち。
年子　売ってないわよ、誰彼構わずなんて。ちゃんと品定めしています。
美奈子　品定め…されているんじゃなくて？
年子　しているのよ、品定め。ねえ、文子さん？
文子　うん、してるしてる。
年子　文子さん！
文子　ごめんなさい。あの、売りたくないときは売りませんわ。断る権利は持っています。
年子　そう。
美奈子　そう。
年子　そう。ね？
文子　そう、です。
年子　…ともかく、絹江さんのせいで私たちの価値まで下がっちゃうのは困るのよ。「サロン貴婦人」なのですから。売るときは高く売らなきゃ。
美奈子　…あなた、本当に貴婦人？
年子　そ、そう。

美奈子　そう。
年子　そう。ね？
文子　そ、そう。
年子　もう、文子さん。
文子　ごめんなさい。もう行きましょう、年子さん。美奈子さんに怒っても仕方ないわよ。
年子　そりゃあ、そうね…。じゃ、美奈子さん、絹江さんに伝えて。安売りしたけりゃ特殊慰安所にでもお勤めなさいって。文子さん、行きましょう。
文子　あ…。（うどんのどんぶりを見ている）
年子　（どんぶりを見て）…。
美奈子　もったいないわ。
年子　いいの、いいの。
文子　いいわよ、少しくらい残したって。
美奈子　そう。
年子　そうよ。ね？
文子　そう。
美奈子　じゃ、後ほど。
文子　ええ、後ほど。
年子　ごきげんよう。

年子と文子は早足でいなくなる。
美奈子は煙草を取り出し、喫む。そして、手紙を取り出し見つめる。
絹江が便所から出てくる。
美奈子は手紙をしまい、声をかける。

美奈子　大丈夫、絹江さん？

絹江　何人（なんぴと）も、いかなる奴隷的拘束も受けない。又、犯罪による処罰の場合を除いては、その意に反する苦役に服させられない。

美奈子　なにそれ？

絹江　日本国憲法第１８条「奴隷的拘束及び苦役からの自由」。

美奈子　憲法？

絹江　売りたくなけりゃ、売らなくていいってこと。自分の身体なんだから。

美奈子　ああ…。

絹江　だから、放っておいて。勝手にやってるんだから。

美奈子　…でも、気をつけて。おしゃべりすずめが興味深々よ。

絹江　…。煙草、喫むのね。

美奈子は吸いさしの煙草を差し出す。

絹江　（受け取って）どうも。（一口喫む）久しぶり。

美奈子　腕、見せて。

絹江　え？

美奈子は絹江の腕を捲くる。

肘の内側あたりが、青く腫上がっている。注射痕。

美奈子　…。前から気になっていたわ。

絹江　意外だわね。

美奈子　え？

絹江　あんたが人の心配するなんて。

美奈子　絹江さん、いい加減にしないと…。

絹江　説教だったら聞かないよ。
美奈子　でも…。
絹江　勝手にやってるんだから、放っておいて。（美奈子の手を振り払う）
美奈子　…。それで、なんで憲法なの？
絹江　あはは。訊く？　それ、やっぱり。…。そうだよね。おかしいよね。あたしなんかが、憲法って…。
美奈子　勉強しているのね、これからのことを。
絹江　ううん、違うよ。忘れ物。お客の。小っちゃな本が部屋にポーンと放ってあったからさ。パラパラっとね。
美奈子　覚えてるじゃない。
絹江　他にやることないからね、あたし。パラパラパラパラパラパラパラパラ…。そしたら覚えちゃった。
美奈子　…。
絹江　（笑って）あんた、そんな顔するんだね。意外だわ。
美奈子　え？
絹江　感情ないのかと思っていたわ。あんた、ほとんど笑わないしさ。
美奈子　嘘よ。私、笑っているわ。
絹江　笑っているけど、笑ってない。なんだこの女、お高く留まっていやがるっていつも思ってた。
美奈子　絹江さん。
絹江　あはは。今は考えが変わったわよ。あんた、あたしと同じ匂いがする。
美奈子　なによ、それ。
絹江　不幸な匂い。堕ちていくのじゃないかって匂い。
美奈子　え…。
絹江　ごめん、忘れて。喋りすぎだね。あたしと同じ匂いなんて厭だよね。忘れて。あのね、あたし、打った後はいつもこうなの。疲労がポンってね。あはは。あることないことべらべら喋っちゃう。
美奈子　絹江さん、あんまり無理したら身体に…。
絹江　お節介焼くんじゃねえよ。何様のつもりだ。ナンバーワンだからって情けかけてるつもりか？　てめえもこんな売春窟にいるんだ。何も変わりゃしねえんだぞ。

美奈子　…。
絹江　ごめん。忘れて。本当に。厭だね、貴婦人のはずなのに。
美奈子　いいのよ。私だって貴婦人じゃないもの。ドレスに着られているわ。（笑う）
絹江　…笑いなよ。あんた、ちゃんと笑ったらいいのに。
美奈子　…。
絹江　そうしたら完璧な貴婦人ですわよ。
美奈子　ありがとう。
絹江　でも、わかるわ。笑えないわよね、こんなところにいちゃ。
美奈子　…そうね。
絹江　本当にあんた、同じ匂いがするよ。気をつけな。
美奈子　…。
絹江　試しに読んでみる？　憲法。
美奈子　え？
絹江　あたし、調子いいんだよ。憲法の本パラパラやっていると。なんとなく、落ち着くのよね。あんたにもそういうのがあればいいなって。同じ匂いがするから、そういうの、あったほうがいいのかな、なんてさ。
美奈子　うん。今度貸してよ。私にはないから、そういうの。
絹江　わかった。じゃあ、後で。
美奈子　うん。
絹江　うん。…。
美奈子　…。何人（なんぴと）も、なんだっけ？
絹江　何人（なんぴと）も、いかなる奴隷的拘束も受けない。又、犯罪による処罰の場合を除いては、その意に反する苦役に服させられない。
美奈子　…そうだといいわね。
絹江　あはは。やっぱり同じ匂いがする。
美奈子　あら、気をつけなきゃ。

絹江　そうだね。
美奈子　絹江さんも。
絹江　…じゃ。
美奈子　うん。

絹江はいなくなる。
見送った美奈子は封の開いた手紙を取り出し、読む。

美奈子　「むしろ来年の桜を楽しみに散ろうと思う。一点の曇りもないこの心持ちと同じような空に出撃し…」。…いつまでも、私は…

突然、建物とは別の方向から小茂田が現れる。

小茂田　文子さーん！　また来ちゃった！　小茂田さんですー！

驚き、身を固くする美奈子。
女性が文子でないことに気づく小茂田。

小茂田　…。
美奈子　…。

小茂田は顔を引きつらせながら後ずさりし、姿を隠す。
それを見た美奈子は手紙をポケットに入れ、身づくろいする。
小茂田が咳払いをする。
美奈子が咳払いをする。
小茂田が再び姿を現す。

小茂田　（何事もなかったかのように）こんばんは。
美奈子　こんばんは。
小茂田　…ああ、裏庭はこのようになっていたのですね。
美奈子　はい。
小茂田　…文子さんは今日は居られますか？
美奈子　はい。サロンでお待ち申し上げております。
小茂田　そうですか。
美奈子　はい。
小茂田　…。
美奈子　あの、表からサロンにお回りくださいな。
小茂田　はい。…。
美奈子　…。（笑いを堪えている）
小茂田　あの…
美奈子　はい。
小茂田　先ほどのことは…
美奈子　誰にも申し上げません。
小茂田　ありがとう。

小さく笑い出す美奈子。

小茂田　（つられて笑いながら）いや、失敬しました。

美奈子はまだ笑っている。

小茂田　小茂田です。
美奈子　（笑いながら）美奈子と申します。

笑い続ける美奈子。

小茂田　あの、では、表からサロンに回ります。

小茂田は去る。
いなくなると声を上げて笑い出す美奈子。
笑いが収まると、まるで泣いた後のような暗い顔。
手紙を出して、丸めて投げ捨てる。
地味な着物に割烹着姿の和子が顔を出す。

和子　美奈子さん、そろそろ。
美奈子　はーい。

暗い表情のまま建物に向かう美奈子。
和子がどんぶりを乱暴に片付ける。
ヒグラシが鳴く。
溶暗。
気怠い音楽が鳴り、シルエットの女性たちが退場する。

1―2

早朝の裏庭。まだ薄暗い。

ハンチングを被った青木がうろうろしている。
と、建物から人の気配がして青木は物陰に隠れる。
美奈子がガウン姿で出てくる。
美奈子は深呼吸をすると、前場で投げ捨てた手紙を拾い読もうとするが、すぐに便所に向かう。
便所のなかでガタガタする音が聞こえ、木箱を持って出てくる。
薄明かりに照らすように木箱を開けると、注射器とバンドが入っている。
と、サロンの経営者、義男の鼻歌が聞こえてくる。
美奈子は急いで便所に隠れる。
義男は歌いながら、裏庭の椅子に座る。
青木が姿を現して、声をかける。

青木　やあ、ご機嫌ですな。
義男　ああ、おはようさんです。…どちらさん？
青木　いやー、朝晩はこうして過ごしやすいが、今日も暑くなりそうですな。
義男　はあ。
青木　ここのご主人ですか？
義男　はあ。
青木　（便所を指して）そこは、なんですか？
義男　…便所ですが…。
青木　ああ、それはいい。…ちょっと拝借しても？
義男　ああ、どうぞ。
青木　（便所の前まで行き）いや、やはり遠慮しておきます。
義男　そうですか。

その時、小汚い格好のユウジが走ってくる。

ユウジ　あー、やっと追いついた。まったくひどいや、旦那！
義男　しー！　声がでかい。まだ夜明け前だぞ。
ユウジ　でかくもなるよ。ずっと追っかけて、走ってきたんですぜ。旦那、急にいなくなっちまったから。
義男　すまん、すまん。ともかく、声。
ユウジ　言っとくけど、旦那。おれたち、人としちゃあ対等ですからね。
義男　わかっているよ。すまん。勘弁だ。みんな起きちまうだろ。
ユウジ　…。（辺りを見回す）しー？
義男　（頷きながら）しー。
ユウジ　（小声で）はい、新聞。（渡す）
義男　（受け取って、小声で）サンキューベリマッチ。
ユウジ　（小声で）ユーアーウエルカム。
義男　（見出しを見て大声を出す）来たー！
ユウジ　しー！
義男　来た来た来た。
ユウジ　ちょっと、旦那…
義男　見ろよ、ユウジ。「国連、武力制裁決議」。上がるぞー。思ったとおりだ。
ユウジ　旦那。
青木　朝鮮戦争のことですか？
義男　そう。国連軍も参戦して、こりゃ大戦争だ。儲かりますよ。
ユウジ　儲かるのか？
義男　ああ、儲かる。
ユウジ　そうか、儲かるのか。なんで？
義男　は？
ユウジ　（新聞を奪って）なんで戦争で儲かるんだ？　漢字ばかりでよくわからねえ。旦那、どうすりゃいい？　朝鮮に行けばいい

義男　のかい？
ユウジ　馬鹿。ドンパチしに行ってどうするんだよ。頭を使えって。
義男　使える頭がありゃ使ってるよ。ねえ旦那、意地悪しないで教えてよ。
ユウジ　へへへ、株だよ、株。
義男　株？
ユウジ　これから株がどんどん上がるはずだ。
青木　は？
義男　朝鮮半島の戦争で日本の株が上がる？
青木　そう。
義男　いい所に目をつけますね。
青木　いやいや、誰にでもわかることです。
義男　いやいやいや、ぜひお聞かせいただきたい。
青木　そうですか？　じゃ…。いいか、ユウジ。これから朝鮮半島に国連軍が乗り込む。これは大戦争になる。では問題だ。国連軍の中心てのはどこだ？
義男　…（言おうとするが）
ユウジ　アメリカだな。じゃ、その米軍はどこから朝鮮半島に行く？
義男　…（言おうとするが）
ユウジ　日本だな。じゃ、米軍はこれから必要なものをどこで買う？
義男　日本だな！
ユウジ　そう。だから、米軍に必要な物を作っている会社の株を買えばいい。では、必要なものはなんだ？
義男　…。（言おうとするが、わからない）
ユウジ　食い物、着る物、乗り物関連。戦争だって人間がやるんだ。そういう会社の株を買えば必ず値は上がる。
義男　いやいや、なるほど。
青木　いやいやいや、誰にでもわかることです。
義男　武器！　武器はどうだい？　戦争なんだから。

義男　いや、武器の製造はＧＨＱに取り上げられたからな。
ユウジ　そうか。一番儲かりそうだけどな…。
青木　しかし、米軍にとっても日本で武器が調達できれば便利ですな。戦争が長引けば、いずれは…。
義男　なるほど、言われて見れば。
青木　いずれにしても株を買うには元手が大変だ。私にはとても…。
ユウジ　そうだ。旦那みてえな人はいいけど、おれはどうしたらいいんだい？　旦那、金貸してくれるかい？
義男　馬鹿。おれだってそんなに持っちゃいねえよ。これから金策に走らないと。
ユウジ　じゃ、儲かるってのに、おれは手を咥えて見ていろってんですかい？
義男　そういうわけじゃないが…。
ユウジ　金持ちはこれだからな。おれは旦那の靴を何万回と磨いたって、そんな金貯まりゃしないよ。
青木　靴磨きか、君は。では鞍替えして、警察予備隊に入ったらどうだ？　まもなく募集するはずだ。
ユウジ　警察予備隊？　なんだよ、それ。ポリなんか勘弁してくれよ。
青木　警察官じゃないのだよ。まあ、軍隊みたいなものだ。そういうのが新たに組織される。大儲けはできないけど、靴磨いているより稼げるさ。
義男　日本は軍隊を持たないのじゃないですか？
青木　だから、警察予備隊って名前です。アメリカもしばらくは朝鮮半島で手一杯になる。早く日本を独立させようということでしょう。
ユウジ　いんちき臭いな、それ。
青木　現実的なのだよ、アメリカは。
義男　なるほど。そういうことなら、近いうちに武器の製造も…。
青木　さあ、それはわからないが…。
義男　ユウジ。金は貸せないが、ネタは買うぞ。
ユウジ　は？
義男　お前は駅前でどんどん靴磨いて、身なりの良さそうな客から話を聞くんだ。武器製造につながる話があったら持ってこい。そのネタ買ってやる。

ユウジ　なんだい、そりゃあ？
義男　だから、もうすぐ武器が作れるようになるだとか、工場でそういう準備しているとか。そういう話を聞きだすんだよ。そしたらそいつの後をつけて、会社を突き止めりゃいい。
ユウジ　そんなのあるかなあ。
義男　そりゃ、１００回訊いてもあるかないかだ。だから貴重なんじゃないか。そのかわり、高く買うぞ。こういうのはな、ネタが大事なんだよ。株が安いうちに、みんなが知らないうちに買っておかなきゃならない。
青木　ああ、時間はかかるかもしれないが、それはいい方法かもしれない。靴磨き相手の世間話は口も軽くなる。
義男　口に戸は立てられないってヤツだ。秘密をぽろっと漏らすかもしれない。
ユウジ　なんだか、雲をつかむような話だな。
義男　洒落たこと言うじゃないか。だが、考えてみろ、おれとお前の出会いを。
ユウジ　ああ。旦那、おれに商売のことぺらぺらと…
義男　だろ？
ユウジ　馬鹿だよな、旦那。
義男　やかましいや。
ユウジ　へへへ。そうか。まあ、やってみるよ、旦那。本当に買ってくれるんだね？
義男　おう。うまくすりゃ大儲けだ。買うに決まっている。
ユウジ　大儲けか！
義男　おう。
青木　ですが、下手したら手が後ろに廻りますけどね、それ。
義男　え？
青木　犯罪ですよ、それ。内部情報を元にした株取引は禁じられている。
ユウジ　…なんだよ、あんた？
青木　やはりきな臭いなあ、ここは。許可なく売春もしているね、おたく？　（便所の壁を叩く）
ユウジ　ポリか？

青木は警察手帳を出す。

ユウジ　汚ねえな、てめえ。なに嗅ぎ回ってやがる。
青木　岩崎義男さん、ここは飲食店での届出だね。
義男　ええ、うちは飲食店です。
青木　女性が何人もいる。
ユウジ　偉そうに。
義男　黙っていろ。あの、刑事さん、うちは純然たる飲食店でして、楽しく食べて飲んで、それだけです。なにしろ「貴婦人」ですから、売春なんて…。
青木　個室もある。
義男　ああ、個室で静かに飲みたいって方も居られますので。
青木　寝泊りもしている。
義男　それは、あの、お客によっては…。
青木　売春している。
義男　いえ、あの、個室でのことはちょっと。まあ、中には話しているうちに恋愛感情が芽生えまして、その、自由恋愛と言いますか、ね。
青木　埒が開かないな。（便所に）おい、女、出て来なさい。
義男　刑事さん…。
青木　本人に聞いてみる。おい、出てきなさい。居ることはわかっているんだ。

扉が開くと、青木は美奈子を乱暴に引っ張り出す。

ユウジ　おい！　乱暴すんな。戦時中じゃねえんだぞ。
青木　…。（美奈子を放す）
義男　いたのか、美奈子さん。

美奈子　すみません。
青木　綺麗な人ですねえ。こんな人がお客取っているのですか、おたくは。
義男　いえ、だから取っていませんよ。
青木　（美奈子に）どうなのですか？
美奈子　…。
義男　刑事さん、それ以上聞くなら令状見せてくださいよ。
青木　これは捜査じゃない。話を聞いているだけだ。
義男　だったらもう…。刑事さん、自由恋愛ですよ、みんなそういうことでやっているじゃないですか。
青木　認めるのか？
義男　いや、そういうわけじゃ…
青木　ＧＨＱにね、言われているのですよ。許可のない売春を厳しく取り締まれとね。警察も大変なんだ。実績を作らねばいけないから、私の報告を今か今かと待っている。
義男　ＧＨＱが…。
青木　そう。それに婦人運動からも盛んにね。
義男　ああ…。
青木　…大変だ。
義男　…。
青木　…。（咳払いして）君、美奈子さんというのか？　場所を変えて話を…
義男　刑事さん、待ってください。（建物のほうに）和子！　おい、和子！

和子がすぐに出てくる。

和子　兄さん、ここです。
義男　なんだ、いたのか。…昨夜の分。
和子　（厚みのある封筒を出して）はい。

義男は封筒を受け取り、中から2、３枚の１００円札を青木に差し出す。

義男　あの、これでなんとか…。
ユウジ　旦那。
青木　買収するのか？
義男　あの…。
青木　…ますます見逃せない。

義男は突然、跪いて青木の靴を拭き出す。

義男　ああ！　すみません、刑事さん。靴を汚しちまいました。うわー、落ちないな、この汚れは。あの、お詫びと言ってはなんですが、これで弁償させてください。

再び金を差し出す。

青木　いやあ、いいですよ、このくらいの汚れ。
義男　それじゃあ、申し訳が立ちませんよ、刑事さん。
青木　青木です。
義男　あ。どうか弁償させてください、青木さん。
青木　そうですか。そこまで言うなら仕方ない。弁償していただきます。

青木は金を受け取る。
唾を吐く美奈子。

美奈子　ごめんあそばせ。
青木　…私も安月給でね。靴を買い換えるのも大変だ。
美奈子　5足は買えそうですね、お安いの。
義男　美奈子！　すみません、青木さん。
青木　構いませんよ。慣れています。

美奈子がもう一度、唾を吐く。

青木　…。（美奈子を見て）綺麗ですねえ。美奈子さんですか。
美奈子　…。
青木　一度、ゆっくりお話してみたいものですな。
ユウジ　おい…
和子　あの、青木さん。
青木　はい。
和子　一度、サロンに遊びにいらしてください。美奈子がお相手させていただきます。
青木　そうですか。しかし、このようなところは御代が心配でなかなか。
和子　いえ、うちはとても安価にやらせていただいています。
青木　そうですか。そうなのでしたら、ありがたい。
和子　ええ。それはもう本当に。
青木　いやあ、ありがたい。では、美奈子さん。近いうちにじっくり話しましょう。
美奈子　一昨日来やがれ。
青木　…。え？
美奈子　お断りいたします。
青木　…。ははは。
義男　美奈子さん。

美奈子　お断りする権利はありますわ。自由恋愛ですから。ね、旦那さん？
和子　お願い、美奈子さん。
美奈子　何人（なんぴと）も私を拘束することはできません。いいえ、人だけではなく、お金も私を拘束することはできません。ですので、一昨日来やがれ、ですわ。

一同、唖然としているが、やがて青木が笑い出す。

美奈子　和子さん、お客様がお帰りです。和子さん。
青木　いや、それには及びません。退散します。
義男　青木さん、本当にすみません。後できつく言っておきますので…
青木　構いませんよ。返って気に入ったくらいです。自由恋愛、ですからね。

言い捨てて青木は去る。

義男　あの、どうかよろしくお願いします。…美奈子！

ユウジが拍手する。

ユウジ　よく言った！　すごいよ、あんた。
美奈子　すみません。夢中で、私…。

美奈子は膝から落ちそうになるが、義男が抱きとめて椅子に座らせる。

義男　大丈夫かい？　まったく余計なことを。
美奈子　ごめんなさい。思わず…。

ユウジ　いい女だなあ、美奈子さん。格好いいぜ。
義男　ユウジ。
ユウジ　はん。それに比べて旦那はだらしねえや。
義男　なんだと？
ユウジ　地面に這いつくばって、デカに金渡してさ。見ちゃいられなかったぜ。
義男　馬鹿。商売できなくなるところだったんだぞ。あんなことは屁でもない。
ユウジ　へー。そういうもんですか。だったらおれは靴磨きで十分だ。人としちゃあ対等だからな、誰だって。ね、美奈子さん？
美奈子　そうよね…。
ユウジ　ほら見ろ。へへへ。
義男　（突然、怒り）おい、和子。なんだってあんなこと言ったんだ？
和子　…。
義男　デカをサロンに誘うことはないだろ。
和子　でも、兄さん…
義男　口答えするな。お前があんなこと言うからこじれたんじゃないか。
ユウジ　ちょっと、旦那…
義男　うるさい。黙っていろ。和子、だいたいうちの商品をなんだと思っているんだ。よりによってうちのナンバーワンを。馬鹿か、お前。あんなデカなんぞに抱かせるって、どんな了見だ。よけいな口挟むな。お前は隅っこで黙っていればいいんだ。立場をわきまえろ。
和子　…。
ユウジ　旦那、言いすぎだぜ…。
義男　…。
美奈子　商品ですのもね、私。出すぎた真似でした。
義男　…。
和子　美奈子さん。わきまえてください。お金のためですから。
義男　おい…。

和子　どうせ何度も来ますよ。あんな鼠みたいな男。何度でも。
義男　…。

建物から小茂田の叫び声がする。

小茂田　（声）許してくれー！　すまなかった！　どうしようもなかったんだ！

小茂田が裏庭に走り出てくる。
続いて年子と文子も来る。

小茂田　許してくれ。許してくれー。
年子　なんてことするんだよ、小茂田さん。
小茂田　すまなかった。このとおりだ。許してくれ。
年子　大丈夫、文子さん？
文子　うん…。
義男　何事だ！
文子　（近づきながら）小茂田さん…
小茂田　来るな、許してくれ。許してくれ、許してくれ…。
文子　…。
義男　おい、貴様！
文子　やめてください、旦那さん。
義男　しかし…
文子　もう大丈夫ですから。
小茂田　（ぶつぶつと）すまなかった。許してくれ。すまなかった…。
年子　この人、首絞めていたんですよ。文子さんの、首。馬乗りになって。

文子　年子さん。
年子　だって…
文子　夢見てるのよ、小茂田さん。
年子　夢って。あなた、首絞められたのよ。私が行かなかったら…
文子　戦争の夢を見ているの。満州だか、シベリアだかの。
年子　…。
文子　何があったか知らないけど…。皆さん、ちょっと失礼します。

文子は童謡「たきび」を歌いながら小茂田に近づく。
小茂田はその歌声を聞いて、だんだん落ち着いてくる。

文子　（歌い終わり）…小茂田さーん。温かいですよー。
小茂田　うん。うん。

小茂田は文子に抱きつく。

文子　（皆に）シベリアは猛烈に寒かったんですって。暑いのも厭だけど、寒いのも大変よねえ。

絹江が姿を現す。

文子　あら、起こしちゃったわね。ごめんなさい。
絹江　終わったの？
文子　ええ。もう大丈夫。ごめんなさいね。
絹江　いいけどさ、別に。あーあ、いつまで続くのかしらねえ。

言いながら、絹江は便所に向かう。

美奈子　絹江さん、そんなことを…。

絹江　あはは、ごめん、ごめん。

絹江は便所に入ってしまう。

文子　（小茂田を立ち上がらせながら）さ、部屋に戻ろう。行くよ、小茂田さん。

義男　文さん、無理しなくていいよ。

文子　大丈夫です。

義男　いや、その客。これから断ったらどうだい？

文子　…。

義男　目が覚めたら、よく言って聞かせるから。

文子　旦那さんだって戦争に行ったのでしょ？

義男　は？

文子　お金じゃないのです。もう。こうなったら。

文子は小茂田を抱きながら歩き始める。

年子が２人に駆け寄る。

年子　手伝うわ、文子さん。

文子　いいわよ、年子さん。

年子　手伝わせてよ、文子さん。

文子　なに？　変よ、年子さん。

３人は建物に入っていく。

美奈子　旦那さん。戦争は儲かるのですか？

便所から物音が聞こえる。
美奈子は便所の壁に身をもたせ掛ける。
溶暗。

２―１

音楽のなか、女性達が現れる。
プロローグと同じくランウェイ・ウォークだが、客は誰もいない。
青木がウロウロしていて、義男がそれを心配そうに見ている。
男達は退場し、女性達がシルエットになる。

明かりが変わる。
数日後の夕暮れ。
ヒグラシが鳴いている。
美奈子が小冊子を片手に辺りの様子をうかがったりしている。
文子と小茂田がうどんをすすっている。
年子は箸を止めて小茂田を見ている。

小茂田　贅沢になったなあ。
文子　え？
小茂田　贅沢になったよ、ぼくは。

文子　そう。
小茂田　うどんだよ、うどん。
文子　そうね。うどん。
小茂田　贅沢になった。
一同　…。（盛大にする）
年子　ねえ…。
小茂田　（満面の笑みで）なんだい？
年子　なんであんたここにいるの？
小茂田　…。だって、食べたいじゃないか、うどん。
年子　ここでなくてもいいでしょ？
小茂田　…。
文子　いいじゃないの、別に。
小茂田　一緒に食べたいじゃないか。
文子　あら。
年子　あーあ、馬鹿馬鹿しい。早く部屋にお行きなさい。
小茂田　年子さんともだよ。
年子　え？
小茂田　家族みたいじゃないか。３人で、こうしてうどん食べて。
文子　温かいわね。
年子　寒気がするわ。
文子　夏よ、年子さん。
年子　そうじゃなくて。
小茂田　じゃあ、親戚みたい、だったらどうです？
年子　どっちでもいいわよ。
小茂田　よかった。帰ってきたら、誰もいなくなっていたから。

一同　…。（盛大にする）
小茂田　美奈子さんも一緒にどうですか？　よかったら。
美奈子　いいえ。さっき済ませたから。
小茂田　そうですか。
美奈子　でも、親戚の温かさは一緒にいただいていますわ。
小茂田　よかった。ありがとう。
美奈子　でも、ほどほどになさってください。
小茂田　え？
美奈子　足を引っ張るのも身内って言うから、そうならないように。
文子　わかるわ、それ。
小茂田　肝に銘じます。
年子　…ここのとこ、美奈子さん、変わったわね。
美奈子　え？
年子　当たりが柔らかくなったわよ。前だったら、そんな冗談言わなかったわ。
美奈子　そうかしら。
文子　冗談だった？
年子　違ったかしら？
美奈子　冗談ですわ、もちろん。

一同、笑いあう。
美奈子は小冊子を見つめる。

文子　さすがねえ。美奈子さん、ご本なんかお読みになって。
美奈子　あら、たまたまよ。暇だから…。
年子　暇よねー。

文子　本当に。もう5日…。
美奈子　ごめんなさい。私があんなこと言っちゃったから…
年子　いいのよ、いいのよ。悪いのは美奈子さんじゃないのだから。
美奈子　うん。
文子　いやだわ、刑事のタカリなんて。びしっと言ってやって正解よ。
美奈子　でも、まさかこんなことになるなんて。みんなに悪いわ。
年子　少しくらいいいわよ。稼ぎは忘れて、うんと羽伸ばしましょ。
美奈子　ありがとう。
小茂田　しかし、こんなやり方で仕返しするとはよっぽど暇なんですかね、あの刑事。ずっと表に張り付いてるじゃないか。まったく、毎日毎日…。
一同　…。（すする）
年子　…。（小茂田に）あんたも暇そうね。
小茂田　ああ、お恥ずかしい。探してはいるのだけれどね、仕事。
文子　やっぱり、なかなか難しいのね。
小茂田　うん。シベリア帰りは嫌われちゃってね。
文子　あらいやだ。
年子　小茂田さん、戦争前は何していたの？
小茂田　教師。
年子　へー。
一同　…。（すする）
小茂田　信じられないですよね。
文子　そんなことないわよ。言われてみればそういう感じあるわ。
年子　うん。教師だわね。そう言われれば。ね、美奈子さん？
美奈子　ええ、教師にしか見えないわ。
一同　…。（盛大にすする）

美奈子　…悪気はないのよ。
小茂田　いいですよ。本当に頼りない教師でしたから。世の中がどんどんきな臭くなっていっても何もせず、何も言わず。そういう意味ではぼくも戦犯です。
年子　…。（すする）
文子　学校には戻れないの？
小茂田　時期が悪いのですかね。いろいろ理由つけてハネられました。
文子　え？
小茂田　シベリア帰りは頭の中が赤いんじゃないかって。
文子　あらいやだ。アカのスパイだって言うの？
小茂田　冗談じゃないですよ。だからぼくは、ズボン下ろして自慢の蒙古斑見せてやりました。
文子　え？
小茂田　青々としていますよ。
文子　あらいやだ。
小茂田　まさか。冗談ですよ。

４人が笑っていると、義男が外出しようとしている。

年子　旦那さん、お仕事ですか？
義男　ああ。ちょっとそこまで…（年子たちを見て）絵的に何かがおかしい。
小茂田　お邪魔しています。
義男　ああ、小茂田さん。すっかり溶け込んで…。
文子　ごめんなさい、旦那さん。お客さんいないし、なんだか親戚みたいになっちゃったわ。
小茂田　すいません。
義男　ああ、それは構わないが。
美奈子　あの、まだいるのですか？

義男　ああ。弱ったよ。
年子　まったく。なんとかならないのですか？　あの刑事。
義男　うん…。
年子　もう5日ですよ。入り口で来る人来る人に難癖つけて。質が悪いわ。
義男　うん。やっかいなことになった。
美奈子　考えが足りませんでした。まさかこんなことになるとは…
義男　ああ、わかっているよ、それは。
美奈子　すみません。
義男　まあでも、これからは気をつけてくれよ。皆、稼ぎがかかっているのだから。警察にはなにがあっても、ね？
美奈子　はい。あの、私が謝れば済むのでしょうか？
義男　…どうだろうな。ここまで来ると、ちょっとやそっとでは…。それにああいう手合いは癖になると始末に負えない。まさに鼠だよ。
文子　まさか、このままってことはないですよね？
義男　まあ、方々に手を回してみてはいるのだがね…。
文子　私、困るんですよねえ。
義男　ああ、そうだよな。
文子　そうだよなって、ちょっと旦那さん。
年子　文子さん、困るのはみんな一緒よ。
文子　だって、どうしたらいいの？　子どもがいるんです、私。稼いで、食べさせないと。
年子　みんなそれぞれ事情があるんだから…
文子　年子さんだって大変なんでしょ。扶助料が停止されて、なんで軍人の妻になったんだかって怒っていたじゃない。
年子　そりゃそうだけど…
文子　ずるいわよ、年子さん。なんで旦那さんの前だと大人しくなるのよ。いい格好したって、食べられないんじゃどうしようもないじゃない。私、今日のうどんだって我慢しようかって思っていたくらいなのよ。
年子　うどんは関係ないでしょ、今。

文子　関係あるわよ。お金がどんどん出て行くんだから。
年子　「武士は食わねど高楊枝」って言うでしょ。こうなっちゃったんだからしばらく我慢しなさいよ。
文子　食べているじゃない、うどん。それに楊枝だってタダじゃないんだからね。
義男　わかった！　わかった！　やめなさい。なんとかするから。
年子　なによ。この間はお金じゃないなんて格好つけていたくせに。
義男　こら。
文子　こんなふうになるなんて思わなかったからよ。だいたい私は武士じゃありません。
義男　やめなさい！

ユウジが現れる。

ユウジ　旦那！　時間だよ。
義男　おう、ちょっと待ってくれ。
ユウジ　遅れたら失礼だよ、旦那。けっこうな大物だ。こんちわ、美奈子さん。
美奈子　こんにちは。
義男　待っていろ、ユウジ。

義男はポケットから財布を出す。

義男　あんたらがケンカしたって始まらん。いろいろ掛け合ってなんとかしてくる。さ、これ。少ないが。

文子に１００円札を数枚渡す。

義男　年子さん。（渡す）
年子　すみません。

義男　美奈子さんも。（出す）
美奈子　もらえません、私は。
義男　いいからいいから。気にしないで。

義男は美奈子に札を握らせる。
ユウジが手を出している。

ユウジ　ギブミー。
義男　馬鹿。行くぞ。（歩き出す）
ユウジ　はいはい。美奈子さん、おれ稼いでくるからさ。そしたら一度だけ。ね？
美奈子　え？
ユウジ　かー、たまらねえな、その目。冗談だよ、冗談。やっぱり美奈子さんだ。おれ、いつか口説いてみせるぜ。待ってなよ。
美奈子　…はい。
義男　行くぞ、ユウジ！
ユウジ　はいはいはい。じゃ、皆さん、ごきげんよう。

義男とユウジは行ってしまう。
沈黙。

小茂田　文子さん。あの、いつもどおりでいいかな、今日の分？
文子　いらないわよ。
小茂田　でも…
文子　いいって言ってるでしょ。
小茂田　…。
美奈子　あの、これ。（金を差し出す）

文子　え？
美奈子　よかったら、使って。私があんなこと…
文子　馬鹿にしないでよ！
小茂田　文子さん！

文子は行ってしまう。

小茂田　「武士は食わねど」ですか。シベリアでは食い物のためにいろんなことがありました。あんな目に遭わせた人たちを恨んでいますよ、ぼくは。…失礼します。

文子を追う小茂田。
沈黙。
和子が来て、どんぶりを片付け始める。

年子　私のせいじゃないわよ。
和子　…もういいの？
年子　ええ。
美奈子　和子さん。
和子　はい。
美奈子　あの刑事…
和子　まだいますよ。
美奈子　そう…
年子　迷惑だわね。

絹江が急いで来る。

絹江　旦那さんは？
和子　出かけました。

絹江は便所に入る。
物音が聞こえる。

年子　迷惑ね、あれも。自分のことばっかりで。みんなの迷惑を考えたことあるのかしら。

絹江が便所から出てきて、美奈子に近づく。

絹江　どこにやったの？
美奈子　え？
絹江　どこにやったの？　出しなさいよ。
美奈子　なにもしてないわ。
絹江　（辺りを見回しながら）まったく、ろくな事ありゃしないわ。どこにやったのよ？
美奈子　絹江さん。

絹江は美奈子を無視して年子と和子を見比べる。

年子　なあに、絹江さん？　あんたのヒロポンなんか知らないわよ。
絹江　あんた…。
年子　よかったじゃない。これを機会にお止めなさい。
絹江　あんたに関係ないでしょ。
年子　関係あるわよ。迷惑がかかっているんだから。みんなに。

絹江　うるさい！
年子　あなたのためよ、絹江さん。
美奈子　やめなさいよ。

絹江は憲法の小冊子を美奈子から奪い、懸命に読み始める。

美奈子　年子さん、あなた…
年子　なにもしちゃいないわよ、私は。あなたじゃないの？
美奈子　違うわ。
年子　じゃ、誰かがやったのね。正しいことを。
美奈子　正しいこと？
年子　そうよ。みんなのため。それに、絹江さんのためでもある。正しいじゃない。
絹江　（突然、大声で）日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、我らの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思う。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。
年子　…。美奈子さん、あなた責任感じているのでしょ？　みんなに迷惑かけたって。
美奈子　迷惑、かけているわ。
年子　だったら、正しいことをおやりなさいな。みんなのためになることを。
和子　みんな困っています。
美奈子　…みんなのためになることは、正しいことなの？
年子　そうよ。正しいことは、みんなのためになることなの。
美奈子　自分を犠牲にして？
年子　あら、こうなったのはあなたのせいでしょ？
美奈子　…。

年子　腹が減っているのよ、あの刑事。わかるでしょ？　和子さん、青木さんをお呼びしたら？　美奈子さん、お話があるみたい。
和子　はい。

和子は外に出て行く。

年子　ごめんね、美奈子さん。でもみんなのためよ。

年子は行ってしまう。
動かない美奈子。

絹江　ねえ。
美奈子　え？
絹江　だめ。もう、まったく効かない。これ。（小冊子を放りだす）
美奈子　…そう。
絹江　ねえ。
美奈子　え？
絹江　あんたさ、いつもなにか読んでいたじゃない。あれ、なに？
美奈子　…。
絹江　ねえ。手紙？
美奈子　そうよ、悪い？
絹江　誰から？　あんたの旦那？　ねえ、読ませて。
美奈子　いやよ。
絹江　いいじゃない。減るもんじゃなし。あんたがそれ読んで落ち着くなら、私だって。
美奈子　落ち着かないわよ、まったく。
絹江　いいから試させてよ。

美奈子　厭なの。
絹江　大丈夫、検閲じゃないよ。検閲は禁止って書いてある。
美奈子　やめて。苦しくなるだけ、あんなもの。
絹江　だから見せろって言ってるんだよ。
美奈子　え？
絹江　見せろよ。これ以上苦しいものなら、なおさら見せろ。
美奈子　…。
絹江　…苦しい。
美奈子　…（手紙を渡す）
絹江　（読んで）「これが最後の手紙になる。明日、早朝に飛び立つのだ。君に二度と触れられないのは至極残念だが、君を守るために散るならば、むしろ来年の桜を楽しみに散ろうと思う。一点の曇りもないこの心持ちと同じような空に出撃し、そのような空が君の上に永遠に広がることを願っている。美奈子、我が妻。明日は晴れ。」

沈黙。

美奈子　…嘘ばっかり。
絹江　…苦しいね。笑えないわけだ。

和子が青木を連れてくる。

和子　どうぞ。お連れしたわ、美奈子さん。
絹江　なあに、これ？
和子　美奈子さん。
美奈子　…。
和子　美奈子さん。

美奈子　…はい。
和子　さ。
絹江　あは、吊るし上げ？
和子　黙りなさい。美奈子さん、さあ。
美奈子　…。先日は、大変失礼いたしました。
青木　…。
美奈子　立場もわきまえず、あのようなこと。申し訳ありませんでした。
青木　…。
絹江　あはは。
和子　止めなさい。絹江さん、あちらにいらしてください。
絹江　厭よ。こんな面白いもの見逃す手はないわ。
和子　絹江さん。
青木　構いません。（美奈子に）あなたの謝罪は受け入れました。では。（行こうとする）
美奈子　待ってください。
青木　…。はい？
美奈子　受け入れてくださったのなら、もう、止めていただけませんか？
青木　…。何をですか？
美奈子　あの…。
絹江　嫌がらせ。
青木　仕事だ。許可のない売春は取り締まらねばならない。
絹江　あは。
青木　…。（絹江を睨む）
美奈子　…このような場所はたくさんあるはずです。
青木　だから？
美奈子　なぜ、私どもだけなのでしょう？

青木　あなた方だけではない。方々で取り締まりは強化されている。すべていっぺんにとはいかないだけだ。
美奈子　では、なぜ、私どもから…
青木　知ってしまったからです。あなたが、売春していると。違いますか？
美奈子　…。
青木　…私にどうしろというのですか？　ははあ、見逃してもらいたいのですね？　…。いいですよ、見逃してあげても。なにか、理由があれば。なんでもいい。理由をくれませんか？
絹江　あはは。
美奈子　いかがでしょうか、あらためて遊びにいらしてください。私が…
青木　あらためて？
美奈子　…。
青木　みんな困っているのじゃないですか？　毎日の稼ぎがもう5日もない。あなた、なんのためにここで働いているのですか？
和子　青木さん、どうぞお上がりください。美奈子さん、いいわね？
美奈子　…。
青木　厭でしょうね、こんな男。弱みにつけこんで…。
美奈子　…。
青木　だが、そうしなければならない。それともやはり断りますか？　いいですよ、それでも自由恋愛と言うのでしたら。
和子　私が払いますから。美奈子さん。
美奈子　…はい。
絹江　待ちなよ。ねえ、青木さん。そんな堅苦しい女はやめてさ、私と遊ぼうよ。
美奈子　絹江さん。
絹江　辛気臭いんだよ、その女。特攻に行った夫のことをいつまでもさ。
美奈子　止めて。
絹江　ねえ、青木さん。腹が減っているんでしょ？　あたしのほうが食べやすいよ。
青木　（絹江を引き離しながら）申し訳ないが、君では勿体無いのだよ。
絹江　そんなこと言わずにさ。ほら、ここに女がいるよ。食べていいんだよ。

美奈子　絹江さん、止めて。
絹江　ねえ、青木さんってば。
青木　…。
美奈子　青木さん、お上がりください。
絹江　馬鹿。もうちょっとじゃないか。
美奈子　いいのよ。私、部屋に行くわ。
絹江　だめだよ、あんたは。売っちゃだめ。こいつの目当ては体だけじゃないんだから。あんた、こいつに売ったら一生笑えなくなるよ。
美奈子　あなたは？　あなたはいいの？
絹江　…あたしは、いいのよ。
青木　…うらやましい。
美奈子　行きましょう。青木さん。
青木　…なんのために？　あなたも自己犠牲ですか？
美奈子　（笑う）なにを仰っているの？　そんな大層なものじゃありませんわ、刑事さん。半時ほど、あなたに体を売る。それだけですわ。お好きにしていいのよ。
青木　…。
美奈子　絹江さん。私、笑えるわ。でも、本当の笑顔は売らない。（青木に）よろしくて？
青木　…ま、いいでしょう。
美奈子　では、参りましょう。（行きかける）
青木　ただ、できれば…。
美奈子　できれば？　なに？　刑事さん？　口説いてごらんなさい。刑事さん。

先に行く美奈子。
和子に促され、ついて行く青木。
ひとり残される絹江。

溶暗。

2―2

夕暮れの建物内。
暗がりにいる年子と文子が部屋の中を覗いている。

文子　まだなの？
年子　（穴を覗きながら）まだ。
文子　じれったいわね。なにやっているのよ、美奈子さん。さっさとやってくれなきゃ困るじゃない。
年子　刑事も刑事よ。話はついてるのに、なんで手を出さないのかしら。
文子　もう。みんなのオマンマが係っているのに。ちょっと貸して。（覗くのを入れ替わる）…座ってる。
年子　黙って正座してるだけ…。
文子　向かい合って…。お見合い？　お見合いなのかしら、もしかして？
年子　なんで今さらお見合いなのよ。
文子　…そうよねえ。
年子　あー、じれったい。ガバッと行けばいいのよ、ガバッと。
文子　ねえ、もしかしてわからないのかしら？
年子　え？　なにが？
文子　やり方よ、やり方。
年子　まさか。
文子　だって、ほら。モジモジしちゃって。どうしていいのかわからないんじゃない？
年子　じゃあ…
２人　童貞！　きゃー！

２人は覗き穴を取り合う。

年子　あの年で童貞って、相当なものよ。
文子　なんでかな？　なんでかな？
年子　なにか事情があるのよ。相当な。
文子　なによ、事情って。やっぱり戦争かしら？
年子　え？　結婚する前に戦争に取られちゃったとか？
文子　そうそう。そして、離れている間に婚約者は空襲でやられちゃったとか。
２人　あるある。
年子　でも、普通婚約者がいたら先にしちゃうんじゃない？　出征前夜とか。
２人　するする。
文子　じゃあ、なにかしら？
年子　結婚してたってするものね、出征前夜は。
文子　したした。年子さんも？
年子　したしたした。５回も。
文子　えー、すごい。じゃあ、腰砕けで戦争行っちゃったの？
年子　違うわよ。最後が５回もあったの。
文子　え？
年子　あのね、職業軍人だったからいろんな戦地に行かされたの。だから毎回、これが最後かもしれない。これが最後かもしれないって。でも、そのたびに帰ってくるもんだから、終いには２人とも、一応しておきますかって具合。笑っちゃうわ。…まあ、それが最後になっちゃったんだけどね。
文子　…。
年子　どうなったかしら？　童貞。
文子　そうそう。（覗いて）あら、いやだ。相変わらず見つめているわ、畳を。
年子　もう、これだから童貞は。

文子　童貞間違いなしね。あ！
年子　なに？
文子　美奈子さんが立ち上がった！
年子　よし。さすが美奈子さん。そうよ、私たちの命運を握っているんだから。教えてやれ、童貞に。
文子　ボタンを外して…ドレスが…パサッ…。綺麗…。
年子　見せて。（覗く）はあ～。
文子　私も男だったらなあ。
年子　（穴から離れて）ダメ。あんまり見てると目が潰れるわ。
文子　馬鹿ね。（覗く）
年子　ね、童貞は？
文子　うん。今、背広を脱いだ。
年子　よし！
文子　立ち上がった。
年子　行け！
文子　大きく息をして…
年子　ガバッ！　ガバッ！
文子　あ！
年子　きゃー！
文子　背広着ちゃった。
年子　！！！（声も出ない）
文子　…出て行っちゃった。
年子　なんで？
文子　わからないわよ。
年子　だらしないわね…。
文子　うん。でも、泣いていたわ。

年子　え？
文子　たぶん。

沈黙。

年子　…意外とデリケートなのよね、男って。
文子　刑事のくせに？
年子　刑事だからじゃない？　いろいろ知っちゃってできないとか。
文子　あら…。
年子　悪いことしちゃったわ。
文子　そうね…。

溶暗。

3―1

その夜のサロン。
ソファと椅子が数脚ある。
ジャズが流れ、女性たちと義男が連れてきた客の丹羽が饗宴の真っ最中。
丹羽は目隠しをして女性たちを追っている。
ユウジも一緒になって丹羽をはやし立て、義男と青木は笑顔を作って見守っている。

丹羽　どこだー？　待て待て待てー！
ユウジ　真っ直ぐ、真っ直ぐ。右右右左！　あー、頑張れ、丹羽の旦那！
丹羽　どこだ？　こっちか？

文子　こっちよ！
年子　こっちですよ！
美奈子　こっちですわ。
絹江　こっち、こっち！

呼ばれるたびにクルクル方向を変える丹羽。
調子に乗る女性たち。

美奈子　丹羽さん、右ですよ。
年子　左、左、左。
文子　いやだ、丹羽さん、私は後ろ。
絹江　（ソファに上がって）上！　上ですよ！
丹羽　上？
絹江　上！
丹羽　上？　このやろう、本当に上か？
絹江　本当に上。捕まえて、丹羽さん！
丹羽　よーし！

丹羽は必死でジャンプし始める。
大笑いの女性たち。

ユウジ　丹羽の旦那がカエルになった！

丹羽　くそー！

女性たちがひと塊になって、息絶え絶えの丹羽を誘導する。

女性達　（手を叩きながら）丹羽の旦那がカエルになった。丹羽の旦那がカエルになった。

丹羽はカエルのように女性達を追いかける。
女性達はソファの前で待ち構え、機を見て逃げ出す。
丹羽はあえなくソファに倒れこむ。

丹羽　（目隠しを外しながら）あー、ひどい目にあった。君たち、ひどいじゃないか。
美奈子　気が多すぎるのよ、丹羽さん。そんな男性には捕まりませんわ、私たち。
丹羽　はいはい。女性は強いですな、本当に。ズロースが値上がりするわけだ。
文子　丹羽さんたら。

和子がブランデーをグラスで渡す。
青木が美奈子に近づく。

丹羽　（一口飲んで）さて。随分遊ばせてもらいました。貴婦人と遊べるなんて夢にも思わなかった。私一人で貸切りでは申し訳ない。
義男　丹羽さん、それでは？
丹羽　貸しますよ。とりあえず、２０万ですかね。
ユウジ　２０万！
丹羽　返せますか？　利子も含めて。
義男　もちろんです。必ず儲かる話ですから。
丹羽　株を買うってだけなら貸しませんがね。このサロンがあるなら話は別です。ここを繁昌させて、金は返してください。それについては私も協力させてもらいます。よろしいですね？

義男　もちろん。願ったり叶ったりです、丹羽さん。
丹羽　いやあ、金を貸すからには、一蓮托生です。
義男　ありがとうございます。青木さん、明日から再開しますよ。
青木　しかし、あまりおおっぴらにやられては…
丹羽　考えないことです。ＧＨＱやら世論やらありますが、ま、流れの中で上手に泳ぎましょうよ。
青木　…。
丹羽　そのためのあなたでしょう？　ね、青木さん。
義男　（青木に）いや、もちろん、片目つぶってもらうお礼はしますよ。
青木　それには及びません。約束ですから。
義男　…美奈子さん、ありがとう。
美奈子　それには及びません。売っただけですから。
丹羽　（笑う）
義男　…。ともかく青木さん、お願いしますよ。
青木　…ええ。
丹羽　まあ、いずれにしてもそんなに長い話じゃない。迷惑はかけませんよ、刑事さん。
青木　（美奈子を一瞥してから）ええ。
義男　よし。（女性達に）お前たち、明日から張り切ってじゃんじゃん稼いでくれ。おれはみんなと一緒に儲けたいのだよ。世間はこの商売をいろいろ言うが、おれに言わせりゃ、社会事業だ。戦争に何もかも取られちまった人間の生きていく最後の砦だ。
丹羽　それではいっそのこと皆さんの借金を棒引きにしてあげたらどうです？
義男　いや、それは…
丹羽　冗談ですよ。社会事業だなんて言うから。
ユウジ　旦那、頼むぜ。おれも儲けさせてくれよ。
丹羽　きみも一蓮托生だ。お客をどんどん連れて来なさい。
義男　手数料を払うぞ、ユウジ。
ユウジ　ありがてえ！

義男　よし。いいか、みんな。朝鮮での戦争のおかげでやっと日本が潤いだした。これからは、独立して世界の一等国へとまっしぐらに走っていく。おれたちも恩恵に預かろうじゃないか。お前たちが働いてくれた分は、おれがきっちり報いるから、安心してじゃんじゃん稼いでくれ。

ユウジ　よ、旦那！（拍手する）

義男　よーし！　景気づけだ。寿司でも取って今夜は前祝いだ。和子、出前！

和子　はい。

絹江　あーあ、あたし達はどんだけ潤しゃいいんだい？

絹江は出て行く。

見送ると、年子が拍手し始める。

年子　旦那さん、ありがとうございます！

つられて美奈子、文子、和子も拍手する。

音楽が大きくなる。

ユウジ　さすが司令官！　大統領！

義男　おだてるな、馬鹿！　ほら、和子。出前、出前。

和子　はい。

笑いと拍手のなか、女性たちがシルエットとなる。

3―2

裏庭。

美奈子と丹羽が向かい合っている。
丹羽は帽子とカバンを持っている。
そばで青木が話を聞いている。

美奈子　あの、どういうことでしょう？　そんなに長い話じゃないというのは。
丹羽　ああ、きみは…
美奈子　美奈子です。
丹羽　ああ、そう。美奈子さん。随分、勇ましいそうだね。
美奈子　あの、教えてください。長い話じゃないというのは…
丹羽　なぜ知りたい？　きみに何かできるのかい？
美奈子　わかりません。ただ、どうなるか知りたいのです。もし、長い話じゃないというのが何か希望のあるものでしたら…
丹羽　希望？　どういう意味だ？
美奈子　…この生活が終わるのであれば、それは希望です。
丹羽　なるほど。確かにここでの商売は、そんなに長く続かない。もうすぐ売春は赤線地帯に厳しく限られる。そして、すぐに売春自体が法律で禁止になる。
美奈子　では、もうすぐ終わるのですね？
丹羽　では、きみはどうやって食っていく？　借金もあるのだろう？
美奈子　…。
丹羽　政治に期待するかい？　他に食う手段のない売春婦を誰かが助けてくれるかい？　せいぜい自業自得だと言われるのが落ちだ。青木さん、法律で禁止すれば売春がなくなると思うかい？
青木　…いえ。
丹羽　そう。遅かれ早かれ、どこか他所で商売するようになる。いくらきみが勇ましくても。
美奈子　そんな…。
丹羽　自分は特別だと思うのかい？
美奈子　…いいえ。では、私たちはどうすれば…。

丹羽　まあ、今、稼ぐしかないだろうね。希望か…。希望、を、持て、と言ってやりたいところだが。運が良ければ、というところだ。

美奈子　まるで私たちは人ではないような話ですね。あなたはなぜ協力するのですか？

丹羽　え？

美奈子　長い話ではないのに。なぜ？

丹羽　それでも儲かるからさ。

美奈子　…私たちは、利用されるだけ？

丹羽　人聞きの悪いことを言うな。稼がねばならないのだろう？　まあ、考えないことだ。

美奈子　私たちは希望を持つな？

丹羽　考えない方が長生きできるというだけだ。

美奈子　それでは何も変わりません。

丹羽　だから聞いている。きみに何かできるのか？

美奈子　…。

丹羽　私だって運が良かっただけだ。強いて言えば、希望は作るものかもしれないねえ。しんどいことだが。まあ、どちらにせよ、言葉は生活の後付けだよ。

丹羽は立ち去る。

青木　美奈子さん。

美奈子　…。

青木　美奈子さん、聞いてください。

美奈子　なに、刑事さん？

青木　聞いてくれ！

美奈子　…。

青木　あなたは言った。「何人も私を拘束することはできない。お金も私を拘束することはできない」。それ、希望ではないですか？

美奈子　…そうですか。
青木　あなたはすでに証明したじゃないですか。本当の笑顔は売らないと言うあなたは、もう希望を持っています。少なくとも、私はそう信じます。
美奈子　…ありがとう。青木さん。

暗くなっていく。

4

音楽が高鳴り、女性たちのランウェイ・ウォークが始まる。
とても忙しい速さで、義男やユウジ、小茂田までも走り回っている。
絹江がひとりで蹲り、他の女性達はシルエットとなる。

数週間後の裏庭。
夕暮れ時。
うどんのどんぶり3つを前にして小茂田が座っている。
ヒグラシの鳴く声。
和子が現れる。

和子　（便所を指して）誰か入ってます？
小茂田　いえ。今は。

きびすを返して和子は行ってしまう。

小茂田　（和子に）大繁盛ですね、相変わらず。

文子が来て、井戸で水を汲む。

小茂田　文ちゃん。
文子　（汲みながら）え？　（腰を押さえて）あいたたた。
小茂田　大丈夫かい？
文子　うん。まったくもう…。

文子は桶を持って便所に入る。
小茂田は、様子をうかがいに便所の前まで行くが、思い返してどんぶりの方に戻る。少し考え、どんぶりを持ち、嬉々として便所の前に立つ。
文子が出てくる。

小茂田　うどーん！
文子　（小さな悲鳴）なによ？
小茂田　うどん。一緒に食べよう。
文子　あら、いやだ。いいわ。止しとく。
小茂田　今日もかい？
文子　うん。ごめんね。
小茂田　いやいや、いいんだよ。（どんぶりに指を入れてしまい）熱っ。それより、腰、大丈夫かい？
文子　うん。
小茂田　だいぶきつそうだね。
文子　平気よ、まだ。
小茂田　少し休んだほうが。もう何週間も…
文子　休めないわよ！…ごめん。

小茂田　…いや。（どんぶりに指を入れてしまい）熱っ。あはは。

小茂田はどんぶりを元に戻す。

文子　稼がなくっちゃ。
小茂田　ああ、そうだよね。
文子　…。小茂田さん、今日はもう帰ってもらえないかしら？
小茂田　え？
文子　会いに来てくれるのは嬉しいし、心配してくれるのもありがたいけど。
小茂田　うん。じゃあ、うどん食べたら帰るよ。
文子　…ごめんね。

和子が来る。

和子　文子さん、お願い。
文子　はい。すぐ。
小茂田　文ちゃん、いいよ。行って。これ食べたらすぐ帰るから。
文子　そう？　すまないわね…。

小茂田はうどんを勢い良く食べ始める。
あっという間に平らげ、２杯目に取り掛かる。

文子　ちょっと！
小茂田　もったいないから。ね。食べていくよ、全部。やった、３杯もある。
文子　…。

小茂田　すぐだから。
文子　あてつけがましいこと止めてよ！　さっさと帰って。
小茂田　でも…。
文子　小茂田さん。こっちは体張って稼いでるんだからね。この忙しいのに、そんなに一緒にいたいのなら、表に廻ってお金払ってちょうだい。そしたらずっと一緒にいてあげる。
小茂田　…。
文子　…ごめん、本気じゃないのよ。（行きながら）あいたたたー。

文子は行ってしまう。
小茂田がうなだれていると年子ががに股でやってくる。
年子は小茂田と目が合うと、我慢して普通に歩き、井戸で水を汲む。

年子　忙しいわー。嬉しい悲鳴ね。

年子は桶を持って便所に入る。
中から悲鳴。

小茂田　（慌てて）年子さん！　大丈夫ですか？
年子　（声）あー！
小茂田　年子さん！　ちょっと。どうしました？　痛いのかい？　その、あの、あそ、こ…痛いのかい？

年子が便所から出てくる。

小茂田　年子さん…。
年子　（にこやかに）嬉しい悲鳴。

小茂田　いや、とてもそんなようには…。
年子　あー、うどんだね。いい匂い。
小茂田　ああ、どうですか？　年子さんも一緒に。
年子　そうね。いただいちゃおうかしら。まったく、うどん食べる暇もないなんて。
小茂田　大変ですね。
年子　昼日中っから、まったくもう。男って連中は本当に。
小茂田　面目ない…。
年子　年がら年中、盛りがついてるのね。男って。
小茂田　健康でなによりです。
年子　馬鹿。ま、そういう男のお陰で稼げるんだから感謝しなきゃね。いただきます。

年子はうどんを一口すすってやめる。

年子　…もういいわ。痛くて…。
小茂田　年子さん、休まないと。
年子　あの丹羽さんてやり手だわね。湧いて出てくるみたいに、男が次々と。
小茂田　これじゃあ、体が持たないですよ。
年子　日本のどこに隠れてたのよ、あれだけの男たちが。
小茂田　年子さん。
年子　どっちにしたって焼け野原になったのだから、やってみればよかったのよ、本土決戦。
小茂田　そんな馬鹿な…。
年子　じゃあ、うちの人は何のために死んだのよ？
小茂田　…。
年子　…稼がないと。

和子が呼びに来る。

和子　年子さん、お願い。
年子　はい。
和子　早くよ。
年子　わかってるわよ。あんた、誰のお陰で食べられてると思ってるの？
和子　…３万円。年子さん、３万円は残っています。そんなことはお金返してから言ってちょうだい。
年子　…。
和子　急いでね。

和子は行く。

年子　あー！
小茂田　嬉しい悲鳴、じゃない。シベリアの収容所と変わらないな、これじゃ。
年子　…寒くないだけまし、と思わなきゃ。

年子はうどんを再び食べようとする。
頑張って何口か食べ、どんぶりを置く。

年子　（立ち上がりながら）死ぬも地獄、生きるも地獄か。

美奈子が来て、井戸で水を汲み始める。

年子　（美奈子に）あんたに謝らなくちゃね。これだったら、あのまま潰れたほうが良かったかもしれないわ。
美奈子　何言ってるの。生きていかなくちゃ。

小茂田　身体は大丈夫ですか？
美奈子　ええ。ドンと来いですわ。

美奈子は便所に入る。

年子　…体力あるわ。どんなに頑張ったって儲けるのは旦那さんだけなのに。目覚めちゃったのかしらね。

年子は行ってしまう。
絹江が来て、座り込んでしまう。
震えている。

小茂田　きみ、大丈夫かい？
絹江　…放っておいて。
小茂田　でも…。
絹江　持ってない？
小茂田　え？

絹江は注射を手振りで示す。
美奈子が便所から出てくる。

小茂田　美奈子さん、あの…。
美奈子　絹江さん。
絹江　ねえ。持ってない？　（注射の手振り）
美奈子　ないわよ、そんなもの。
絹江　ちっ、じゃあ、働けないよ。（自分の震えを抑えようとする）

美奈子　しっかりして、絹江さん。
絹江　厭なんだよ、もう。
美奈子　そりゃ、厭だわ、私だって。でも、生きていかなくちゃ。
絹江　死んだって構いやしないよ。
美奈子　大丈夫。もうすぐ終わる。そんなに長い話じゃない。
絹江　嘘だよ、そんなの。
美奈子　ね、病院に行こうよ。とにかく絹江さん、体を…
絹江　厭だよ、病院なんて。誰が金払うんだ。また借金が増えるだけじゃないか。
美奈子　その時はその時よ。私も協力する。
絹江　いい加減なこと言わないでよ。
美奈子　本当よ。
絹江　…どうせいざとなったら逃げるくせに。
美奈子　逃げないわ。信じて。
絹江　みんなそうだよ。
美奈子　私は逃げない。ねえ、信じて。同じ匂いがするのでしょ？　あなたと私。だったら信じて。
絹江　（笑って）同じ匂いがするからだよ。（咳込む）
美奈子　絹江さん…。小茂田さん、医者を。
小茂田　はい。
絹江　やめろ！　舌噛み切るぞ！

躊躇する小茂田。
暴れる絹江を抱きしめる美奈子。

絹江　（美奈子に）ねえ、いっそのこと終わりにしておくれよ。
美奈子　だめ。もうすぐ終わるけど、自分で終わらせちゃいけない。

絹江　なによ、それ。
美奈子　わからないわよ、私だって。

義男と和子が急いで来る。

義男　絹江、なにやってるんだ！
絹江　（明るく）あ、旦那さん、打っとくれよ。
義男　お客をほっぽりだして、お前は。
美奈子　旦那さん、医者を呼んでください。絹江さん、体が…
義男　馬鹿なこと言うな。医者なんか必要ない。
美奈子　だって…
義男　ただのヒロポン中毒だ。心配するな。おい、絹江。部屋に行け。お客が待っているぞ。
絹江　ねえ、打ってよ。
義男　馬鹿言ってるんじゃねえ。さっさと働け。お客が待ってる。
美奈子　やめてください。できるわけないわ。
義男　あんたもだ。こんな所で油売ってないで、部屋に行け。
美奈子　ふざけないでよ。放っておけないわ。
義男　勘弁してくれ…。
美奈子　医者を呼んでください。
義男　稼ぎ時なんだよ。
小茂田　あの、私が行ってきますよ。
義男　ふざけるな！　部外者は黙っていろ。

年子と文子が走ってくる。

年子　旦那さん、お客がびっくりしてるよ。
義男　大丈夫だ。なんでもないから。
文子　そんな大声出して。
義男　いいから部屋に戻ってくれ。

絹江が美奈子の腕を振りほどく。

絹江　旦那さん！
美奈子　絹江さん。
絹江　（義男に近づきながら）大丈夫だよ。ねえ、旦那さん。あたし、商売してくるよ。ね、だから、頼むよ、旦那さん。打っておくれよ。

絹江は義男のズボンに手をかける。

義男　やめなさい。
絹江　なんでよ。こうすりゃ、打ってくれるんだろ？
義男　やめろ！

義男は絹江を放りだす。
美奈子が絹江を庇おうとする。

美奈子　なんてことを！
義男　うるさい。ポン中に構っていられるか。
絹江　打ってくれよ、畜生！

絹江は憲法の小冊子を取り出し、読み始める。

絹江　日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたって自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。（この後、絹江はぶつぶつと憲法を読み続ける）

義男　くそっ。なにが憲法だ。理想で飯が食えるか。おい、おまえら。稼がなくていいのか？　対岸の火事で日本中が沸きかえっているんだ。今、稼がなくてどうする。この商売が厭なら厭でもいいが、お前らはこの商売しかないのだろうが。ほら、売ってこい。

美奈子　旦那さん、そんなこと言わないで。

義男　本当のことだろうが。

美奈子　それでも前は「貴婦人」でした。こんな商売でも、ただの商品じゃなかったわ。

義男　「貴婦人」だろ。綺麗なドレスにアクセサリー。言葉遣いさえ気をつけてりゃ、どこからどう見ても「貴婦人」だ。

美奈子　外見なんてどうでもいいわ。どうしちゃったのですか？

義男　お前、そのお召し物は誰に買ってもらったんだ？　どの口が言ってるんだ、そんなこと。

美奈子　旦那さん…。

義男　お前らはそんなこと考えなくていいんだよ。考えるな。

美奈子　医者を呼んでください。

義男　おれが一人で儲けようって話じゃない。働いてくれたら、お前らの取り分だってどんどん増やしていけるんだ。

美奈子　医者を…

義男　年子さん、文子さん。きみらはわかってくれるよね？

年子　…でも。

文子　呼んであげてください、医者を。そうしたら部屋に戻りますから。

義男　だめだ。

美奈子　旦那さん。

義男　黙れ。なぜおれが戦争未亡人のお前らを雇ってると思っているんだ。働けよ。働いて働いて、みんなで儲けるんだよ。

憲法が聞こえる。

年子　これじゃあ、あんまりです。
文子　小茂田さん、お願い。
小茂田　わかった。
義男　潰れるぞ、そんなことをしたら。いいのか？　おまえら稼ぎがなくなっちまうぞ。よく考えろ。医者なんて呼んで大事にしちまったら、すぐだ。よく考えてくれ。
美奈子　…旦那さん、考えるの？　考えないの？
義男　…。

憲法が聞こえる。

美奈子　小茂田さん、お願いします。
小茂田　はい。
文子　ちょっと待って。
小茂田　え？
文子　…困るのよ、私。よく考えたら。
美奈子　え？
文子　そりゃ、美奈子さんはいいわよ。一人だから。でも、私は、子どもが…。
小茂田　文ちゃん。
文子　だって、誰にも頼れないじゃない。私が稼ぐしかないのよ。ねえ、年子さん。
年子　そうねえ。困っちゃったわね。私も姑さん抱えているし…。
美奈子　何を言っているの？

文子　そりゃ、絹江さんには悪いけど…。
年子　…困るわね。本当に…。

憲法が聞こえる。

義男　わかった。ありがとう。美奈子さん、あんたはやめてもらってもいい。
美奈子　え？
義男　あんたがナンバーワンでも構いはしない。稼がないのなら、辞めてもらう。和子。
和子　はい。
義男　今日から表に出ろ。
和子　…。
義男　客を取って、お前も稼げ。
和子　お客を、取るのですか？
義男　そうだ。
和子　…あなたの妹です。
義男　だからなんだ？　妹だからって特別扱いはしない。みんな平等だ、これからは。
和子　…はい。

憲法が聞こえる。

美奈子　絹江さんはどうするのですか？
義男　え？
美奈子　私のことはけっこうです。絹江さんはどうするのですか？
義男　…かわいそうだが、辞めてもらう。ひどい中毒だ。
美奈子　搾り取るだけ搾り取って、病気になったらお払い箱か？

義男　なんだと？
美奈子　（唾を吐いて）希望はある。きっと、希望はある。
義男　狂ったのか、お前も？
美奈子　病院に連れていきます。（絹江を連れていこうとする）
義男　やめろ！

美奈子と義男が揉み合いになる。

義男　ここを潰す気か！
年子　ちょっと！
文子　止めて！

美奈子を絹江から引き離す義男。
はずみで絹江が倒される。

美奈子　絹江さんよりお金が大事なの？
義男　なんて言い草だ。
美奈子　連れて行きます。あんたなんかに任せておけない。私が連れて行きます。
文子　旦那さん、私が余計なこと言いました。
年子　私も。やっぱり、医者を…
義男　商売の邪魔をするな！　ああ、わかった。責任を取ればいいのだろう？　責任を。（地蔵に向かう）
年子　旦那さん？

義男は地蔵の下から木箱を取り出し、その中から注射器を出す。

文子　ちょっと！
義男　（美奈子に）どけ！
美奈子　来ないで。
義男　せめてもの情けだ。おれが廃人にしてやる。
美奈子　やめなさい。
義男　段々狂うよりいくらかましだ。おれが一生責任取ってやる。どけ。
小茂田　やめろ！

小茂田が義男に組み付く。
揉み合うが、小茂田は倒されてしまう。

義男　てめえは黙ってろ。
小茂田　（立ち上がりながら）こんなこと黙っていちゃいけない。今度は黙っていないぞ。

小茂田は再び義男に組み付くが、義男に叩きのめされる。

義男　…食い物が違うんだよ、貧乏人とは。
文子　小茂田さん…。
小茂田　来るな。来ないでくれ。おれは、今度こそ、黙っていないぞ。わかっているのに黙ってるなんてことは、もうしない。（立ち上がり）やってみろ。シベリアでのリンチはもっと酷かった。

再び組み付いていく小茂田。
絹江の暗誦する憲法が聞こえている。
何度倒されても組み付いていく小茂田。

青木が来る。

青木　やめなさい！

青木は、小茂田を義男から引き離す。
疲れきって尻餅をつく義男。
美奈子が絹江を抱きしめる。

青木　なにやってるんだ、あんたら。
美奈子　医者を。医者をお願いします。
絹江　ねえ、おはぎが食べたいなあ。
美奈子　え？
絹江　おはぎ。食べたいなあ。
美奈子　絹江さん？
絹江　小豆をたっぷり使って。砂糖もいっぱい入れた、おはぎ。
美奈子　…うん。そうね。青木さん。

青木が絹江の目を覗き込み、頚動脈に指を当てる。

絹江　おはぎ。
美奈子　希望、あるわよね？　青木さん。
青木　…。（義男に）病院に連れていきます。いいですね？
義男　…あんたも責任問題になるぞ。
青木　（美奈子たちを見て）死んじまいますよ。
義男　なら、勝手にしろ。

義男は自分の腕に注射する。

青木　おい！　（注射器を取り上げ）馬鹿をするな。

薄ら笑いながら義男は大の字に寝てしまう。

義男　あーあ。おれも死んでりゃ良かったんだ。みんなに申し訳ない。こんな様じゃ。

義男の息が荒くなっていく。

和子　許してやってください。絹江さんは、兄の妻なのです…。

絹江　おはぎ…。

美奈子　…うん。食べよう、おはぎ。私、作るよ。一緒に食べよう。

皆が呆然としている。

溶暗。

5

夜中の裏庭。

丹羽が辺りの様子をうかがっている。

ユウジが建物の方から来る。

ユウジ　旦那。

丹羽　お、どうだった？

ユウジ　あっちの旦那はやっぱり寝込んでいるみたいだけど、妹さんが出たので、渡しておきました。
丹羽　そうか。で、帳簿は？
ユウジ　今、持ってくるって。
丹羽　よし。まずまず一安心だな。あれを押収されたら私も…。で、妹さんはどんな様子だった？
ユウジ　いやあ、それが…。
丹羽　泣いていたか。無理もない。
ユウジ　いやいや、旦那。それがですね、おかしいのですよ…
丹羽　呆然としていたのか。無理もない。ユウジくん、人間は許容範囲を超える出来事には呆然としてしまうものだよ。
ユウジ　いやいやいや。そうじゃないのですよ。
丹羽　怒っていたのか？　無理もない。
ユウジ　だから、違うってんですよ。
丹羽　そりゃ、無理もない。違う、こんなはずじゃなかったと嘆くのが人情ってものだ。
ユウジ　わからねえな、旦那。泣いてもないし、呆然ともしてないし、怒っても、嘆いてもいなかったんです。
丹羽　じゃ、どうしていたのだい？　もったいぶらずに早く言いなさい。
ユウジ　いや、だからあの妹さん…
丹羽　泣いていたか、無理もない。
ユウジ　旦那！
丹羽　冗談だよ。で、どうだったのだい？　実際。
ユウジ　…言っておきますけどね、旦那とおれは人としては対等ですからね。
丹羽　わかっているよ。しかし、こういう時には大抵、打ちひしがれているものさ。
ユウジ　…笑ってました。
丹羽　…え？
ユウジ　妹、和子さん、笑ってました。
丹羽　どうして？
ユウジ　さあ？

丹羽　さあって、きみは見ていたのだろ？
ユウジ　そうですけど、びっくりしちまったから。どこの世界に借用書の写し見せられて笑う女がいるってんですか。
丹羽　…どんな風に笑った？
ユウジ　え？
丹羽　あまりの金額に思わず笑ってしまったのか？
ユウジ　いや、そういう感じでは…
丹羽　では、あきらめたように笑ったのか？
ユウジ　旦那…。
丹羽　まさか、鼻で笑ったのじゃないだろうな？
ユウジ　旦那！　本当に対等だと思っているのかい？
丹羽　すまんすまん。で、どうだったのだい？　実際。
ユウジ　ニヤーっと笑いました。
丹羽　ニヤーっと？
ユウジ　そう。ニヤーっと。
丹羽　なんで？
ユウジ　さあ？
丹羽　さあって、きみは見ていたのだろ？
ユウジ　旦那！
丹羽　…しかし、恐ろしいじゃないか。ニヤーっと…。
ユウジ　…自分で行けばよかったんですよ。
丹羽　いやあ、ものには順序ってものがあるのだよ。素直に従ってくれているなら私は出しゃばらないほうがいいのだ。
ユウジ　なるほど、そういうものですか。じゃあ、旦那は帰っていたらどうです？　帳簿はおれが受け取って、朝一番で届けますよ。
丹羽　いやあ、そうもいかないさ。物が物だけにね。
ユウジ　は？　どっちなんですか？　和子さん、素直に帳簿を持ってくるって言っているのだから…。旦那、おれかい？　おれが信用できないのかい？

丹羽　…金持ちケンカせずって言うだろ？　あれは嘘だ。年がら年中ケンカしているようなものだ。
ユウジ　ゾッとしないぜ、旦那。一蓮托生ってのは嘘ですかい？
丹羽　人としては対等だと思っているからだよ。きみを馬鹿にしていたら、任せて眠っているさ。
ユウジ　へ。言ってらあ。かわいそうな人だ、旦那も。

青木が来る。

ユウジ　青木の旦那…。
丹羽　…どうですか？　様子は。
青木　症状が落ち着けば帰ってこられるでしょう。その先は、彼女次第ですが。
丹羽　…薬は恐いですなあ。
青木　丹羽さん、金をあきらめるつもりはありませんか？
丹羽　なんだい、藪から棒に…。
青木　貸した金を…
丹羽　ないね。
青木　…。では、これから踏み込みます。
丹羽　きみ…。
青木　令状はあります。売春取締条例違反、薬事法違反。他にも拾い物があるかもしれませんね。特に帳簿はじっくり調べさせてもらいます。サロンのことだけじゃなく、不正な株取引に関わっているとの噂もありますからね。
丹羽　なんのつもりだ、いったい？
青木　…。
丹羽　いくら欲しい？
青木　…金をあきらめてくれればけっこうです。
丹羽　そんなにいい所を見せたいのかい？　彼女に。
ユウジ　汚ねえデカだ。それで美奈子さんに迫ろうってのか？

丹羽　私があきらめたところでどうにもならない。彼女らは相変わらず借金漬けだ。
青木　あなたがあきらめてくれれば、店のほうにもお願いしてきます。お釣りのくる金額だ。
丹羽　なんだ、あんた？　正義の味方を気取っているのか？　あんたが頑張ったって、仕方ないじゃないか。時には正義も金で買えるんだぞ。
青木　何人も私を拘束することはできない。金も私を拘束することはできない。
丹羽　…なんだい、そりゃ。
青木　希望です。
丹羽　あんた、自分の身がどうなってもいいのか？
青木　覚悟の上です。
丹羽　（笑って）ユウジくん、どうやら彼は言ってもわからないようだ。
ユウジ　…。
丹羽　言ってもわからないようだ、ユウジくん。
ユウジ　いやだよ。
丹羽　…大丈夫だ。後始末は私がちゃんとするから。
ユウジ　そうじゃなくて…。
丹羽　相手がデカだろうが関係ない。私には金がある。
ユウジ　やりたくねえんですよ。旦那のためにそんなこと。やりたくねえんです。
丹羽　きみ、根に持っているのか？　さっきのことを。
青木　あきらめたらどうです？　丹羽さん。運が悪かったのですよ。
丹羽　馬鹿を言うな。自分の金をあきらめてたまるか。
青木　金も帳簿もってのはムシが良すぎですよ。その金で帳簿を買ったらどうです？　弱みは無くなりますよ。
丹羽　だが、金は返ってこない。
ユウジ　付き合ってられねえな、もう。旦那たちは同類だ。二人とも人を思い通りに動かそうってんだろ。おれは関係ないぜ。勝手にやってくれよ。

ユウジが行こうとするところに和子が手ぶらでやってくる。

和子　皆さん、お引取りください。
青木　ああ、騒がしくて申し訳ない。今、伺おうとしていたところです。
和子　お引取りください。
青木　…。ご迷惑でしょうが、聞いてください。
丹羽　妹さん、金は返してもらいますよ。
和子　あの、返せません。
丹羽　何を言っている。どんなことをしても返してもらいますよ。
青木　いや、それでいいのです。では、帳簿を私に預けてください。
和子　帳簿？
青木　そう。どちらにも悪いようにはしません。
丹羽　おい、勝手なことをするな。妹さん、帳簿を出したらあんたの兄さんだって手が後ろに回っちまうぞ。
和子　あの、帳簿は兄が持っていましたので、私は…。
青木　そうですね。では、寝込んでいるところを申し訳ないが、お兄さんと話を…
和子　兄は、死にました。今。

和子はニヤーっと笑う。
沈黙。
青木が建物に飛び込んで行く。

和子　量を間違えたのじゃないでしょうか。薬。また、自分で。

和子は外に歩いていく。
呆然と見送る丹羽とユウジ。

溶暗。
倒れた地蔵に明かりが残る。

6

美奈子が地蔵を起こし、手を合わせる。
辺りが明るくなると、数日後の裏庭。
青木が拝む美奈子を見ている。
絹江が座って空を見つめている。

美奈子　おはぎ、お供えしようよね。
絹江　…うん。あ、赤トンボ。
美奈子　え？　本当だ。早いわね、今年は。
絹江　終わる…夏が。
美奈子　…まだまだ暑いわ。…本当にどこに行っちゃったのでしょう？　和子さん。
青木　ええ、行く所はそんなに多くないはずですが…。しかし、帳簿も財産もすべて消えているのですから、妙なことにはなっていないと思います。ただ、計画的であったということにはなりますが…。
絹江　どっちでもいい。
美奈子　…辛いわね。
青木　…事実だけを考えましょう。ともかく、このままならあなた方の借金は棒引きだ。もう、どこへでも行けます。
絹江　赤線にもね。
美奈子　絹江さん。ゆっくり考えましょう。ともかく帰って来られたのだし。
絹江　…ごめん。
美奈子　今の私は、おはぎで頭がいっぱい。
絹江　食べたいねえ。

美奈子　もう少しよ。
青木　あの、なにかお手伝いできることがあれば言ってください。
美奈子　あら、大丈夫ですわ。今、下ごしらえを年子さんと文子さんが。小豆を煮込んだり、お米を炊いたり…
青木　いえ、おはぎのことではなく。これからのことです。あなた、方のこれからのこと…。
美奈子　…。
絹江　２人きりにしてあげたいけど、体がまだきついのよね。
美奈子　いやだわ、絹江さん。そんなのじゃありません。
絹江　（笑う）。
青木　…刑事を辞めようかとも考えています。
美奈子　え？
青木　自分が恥ずかしいのです。たくさんの辛い出来事を私は利用してきました。…恥ずかしいことです。
美奈子　…。
青木　だったら、いっそ刑事を辞めて、なにかお手伝いができないかと。その、例えば、あなた、方のこれからのことですとか…。
美奈子　…ありがとうございます。そんなふうに思ってくださる方が刑事さんだなんて、心強いですわ。
青木　…。
絹江　刑事さんが友達なんて、初めてだわ。
美奈子　そうね、私も。
青木　…失礼しました。では、私は仕事に戻ります。
美奈子　頑張ってください。
青木　はい。あなた方も。…どこかに落ち着いたら連絡をもらえますか？
美奈子　まだ何も決まってませんのよ。早く働き口を探さなくてはならないのですが。
青木　そうですか。しかし、ご連絡いただかなくても、その気になればすぐです。刑事ですから。

青木は行ってしまう。

絹江　いいの？
美奈子　…いいのよ。
絹江　私だったらいいんだよ。借金も無くなってすっきりしたんだから。あんたの足手まといにはなりたくないし、ひとりでなんとかするよ。
美奈子　馬鹿ね。そんなのじゃないって言ってるでしょ。
絹江　でも…
美奈子　それに青木さんったら、刑事辞めるってなあに？　いい年した男のすることじゃないわ。
絹江　（笑いながら）それもそうね。
美奈子　…それに、急にこんなことになって。まだ整理がつかないわよ。
絹江　ここには居られないし、働かなくちゃね…。
美奈子　ゆっくり考えましょう。まずは体を休ませて、ね。
絹江　うん。

小茂田が現れる。旅行カバンを持っている。

小茂田　やあ、退院おめでとうございます。
絹江　ありがとう。
美奈子　あら、荷物それだけ？
小茂田　ええ。身軽なもんです。
美奈子　そう。今、文子さんを呼びますね。
小茂田　いや、大丈夫です。待ちますよ。汽車までまだ余裕がありますから。まあ、急ぐことはないです。
絹江　あんたにも迷惑かけたわね。
小茂田　いえいえ、そんな。頑張ってください、これから。
絹江　…うん。
小茂田　大丈夫ですよ。希望はあるものです。いつでも。

絹江　気楽な人だわね、あんたは。
小茂田　ええ、そうです。これからの日本は戦争をしない国ですから。それに、他人からあれこれ強制されることもない。自由です。自分たち次第です。
美奈子　あら、憲法ね。
小茂田　そう。
絹江　そんな大きな話、どうなるかわからないよ。
小茂田　もちろん、そのための努力は続けないといけませんが…。
絹江　努力、苦手。
美奈子　絹江さん。
絹江　…ごめん、ごめん。
小茂田　絹江さん、白樺派ってご存知ですか？
絹江　え？
小茂田　白樺派。文学では理想や自由を謳った作家たちのことですが、シベリアの収容所にもいたのですよ、白樺派。こちらは、あきらめてしまう人たちのことです。毎日毎日、マイナス４０度にもなるシベリアで強制労働させられてあきらめてしまう人たち。無理もないです。ほんのちょっとの食事といつ終わるかもわからない重労働ですから。やせ細った体に南京虫がたかって…。あきらめた人たちはすぐ死んでしまいました。そして、シベリアにずーっと広がる白樺の林に埋められたのです。だから、白樺派。
美奈子　…よく、ご無事で…。
小茂田　だから、皆で言い合っていました。白樺派になっちゃいけない。白樺派になっちゃいけないって。あきらめたら、本当に一週間ももたないところでした。しかし、そうやって励ましあって、ほんの少しの希望にすがって生き延びたのです。もう一日、もう一週間と。
美奈子　希望…。なにが希望だったの？
小茂田　だって面白いでしょう？　あきらめて死を覚悟した人たちを、自由や理想を謳った作家たちに模したのです。皮肉が利いているじゃないですか。そうやって笑えることが、小さな小さな希望だったのです。おかげで、ぼくは帰って来られた。
絹江　そんなことが、希望だったの？

小茂田　少なくとも、生き残った者たちにとっては。
絹江　…。ありがとう。
小茂田　いえ。
美奈子　元教師って本当だったのですね。
小茂田　（笑って）かなわないなあ、美奈子さんには。そうこなくっちゃ。

文子が建物内から現れる。

文子　小茂田さん、いつからいたのよ、そこに。
小茂田　ああ、ごめんごめん。どうだい、準備は？
文子　なに呑気なこと言っているの。女の準備は大変なのよ。早く手伝って。
小茂田　はい、ただいま。（行きかけて美奈子たちに）文ちゃんに対しては白樺派です。
美奈子　まあ。
文子　ちょっと、小茂田さん、早く。
小茂田　はいはい、ただいま。

小茂田と文子は建物に入る。
入れ替わりに年子が荷物を持ってやってくる。

年子　おはぎ、準備できたわよ。もう少し冷ましたら、握って食べてね。
美奈子　年子さん、食べていかないの？
年子　うん。
美奈子　…そう。
年子　ごめんね。嫌いなわけじゃないのよ、おはぎ。
美奈子　わかっているわ。

絹江　行くの、赤線？
年子　うん。稼がなくちゃ。
絹江　姑さんって言ったって、他人じゃない。なんであんたが犠牲になるのよ。
美奈子　絹江さん。
絹江　ごめん。体、気をつけて。あたしが言えたことじゃないけれど。
年子　…見捨てられないわよ。私、周りを散々煽ってきたのだから。お国のためにって。それなのに、軍人の夫が死んで、戦争に負けて、それで「はい、そうですか」って姑捨てちゃったら、私はいったいなんなのよ。あんまり無責任じゃない。…運が悪かったってあきらめるわ。
絹江　男らしいね、あんたは。
年子　やめてよ。これから赤線で働こうってのに。
絹江　潔いってこと。
年子　ま、夢も希望もないけど、姥捨て山に行ったなんて言われたら女の沽券に関わるわ。

小さな笑い。
沈黙。

年子　さて。（行こうとする）

その時、鞄をひとつ持った文子と、たくさんの荷物を抱えた小茂田が出てくる。

文子　ほら、頑張って。
小茂田　文ちゃん、本当に全部持っていくの？
文子　当然よ。文句言わない。男でしょ？
小茂田　（荷物を降ろして）ひゃー、こりゃ前途多難だな。
美奈子　大変そうね…。

文子　だめよ、美奈子さん、甘やかしちゃ。戦争に行った男は強い。でしょ？
小茂田　いや、でも、ぼくは空に向けて鉄砲撃っていたクチだからなあ。
文子　あら、いやだ。本当に？
小茂田　そりゃそうさ。上官だけだよ、張り切っていたのは。ぼくらみたいな普通の男にできっこないさ。
文子　じゃ、私が鬼軍曹だって言うの？
小茂田　いや、そうじゃないよ。文ちゃんは文ちゃんだよ。
文子　そんなこと言って。荷物はこれだけじゃないのだからね。
小茂田　えー！
文子　もう、これだから。落ち着いたら子ども迎えに行くんでしょ。でっかい荷物が増えるわよ。
小茂田　子どもは荷物じゃないよ、文ちゃん。ぼくらの子どもは荷物なんかじゃない。ぼくらの希望だよ。
文子　…そうだわね。ありがとう。（手を握る）
絹江　ごちそう様。さっさと行っちゃいなよ。
文子　あら、いやだ。ごめんなさいね。
美奈子　ねえ、食べていきなさいよ。私急いで作ってくるわ、おはぎ。
小茂田　ああ、そりゃいいですね。
文子　だめよ。荷物抱えているんだから、早めに行かなきゃ。
小茂田　でも、せっかくだし、名残惜しいじゃないか。
文子　もう、男ってなんでこう感傷的なのかしら。ほら、行くわよ。
小茂田　はい。
美奈子　じゃあ、お別れね。
文子　うん。まあ、死ぬわけじゃなし。またいつか会いましょう。
美奈子　そうね。じゃあ、お元気で。
文子　ありがとう。年子さんも駅でしょ？　一緒に行きましょうよ。
年子　ううん、いいわ。まだ余裕あるから。
文子　そう。じゃあ、ここでお別れね。

年子　元気でね。
文子　うん。年子さんも。
年子　うん。
文子　じゃ、小茂田さん、行くわよ。（歩き出す）
小茂田　あの、皆さんお世話になりました。

２人は去っていくが、文子が振り返る。

文子　みんな、元気でね！

２人は行ってしまう。
年子が身づくろいをする。

美奈子　じゃあ、年子さん、食べていってよ。
年子　ううん、もう行くわ。
美奈子　だって…。
年子　いいのよ。一緒に行きたくなかっただけだから。
美奈子　…うん。
年子　みっともないところを見られちゃったわね。
美奈子　ううん。

兵隊ズボンにゲートルを巻いたユウジがやってくる。

ユウジ　こんちわ。
美奈子　ユウジさん。どうしたの、その格好？

ユウジ　ああ、ちょっと朝鮮に行ってくるもんでご挨拶をってね。稼いできますよ。
美奈子　朝鮮に？　どうして？
ユウジ　国連軍のお手伝いってやつです。
美奈子　戦争に行くの？
ユウジ　ドンパチやるわけじゃないんですよ。後方支援って言うんですか。食料とか荷物をいろいろ運んだり。そういう仕事があるんです。高給待遇でね。
美奈子　そう。じゃ、危なくないのね。
ユウジ　うん、まあね。たぶん。
美奈子　ユウジさん。
ユウジ　…。
美奈子　危ないのでしょ？　戦場に行くのだから。
ユウジ　うるせえな。当たり前だろ。戦争やってるんだから。でも、高給なんだよ。稼げるんだよ。
美奈子　死んじゃったら元も子もないじゃない。
ユウジ　じゃあ、一生靴磨いてろってのかい？　あんたらは一生売春婦でいいのかい？
美奈子　…。
ユウジ　なにも希望がないより、一か八かだ。金持ちになりてえんだよ。まあ、見てなって。たっぷり稼いで帰ってくるから。じゃ、そういうことで。（行こうとする）
絹江　ねえ、あんた。そんなに急がなくてもいいじゃないか。でかい戦争なんだろ？　今、おはぎ作るからさ。食べていきなよ。
美奈子　そうね。急いで作るわ。
ユウジ　…いらねえ。
美奈子　え？
ユウジ　売春婦の作るものなんざ食べねえ。おれはのし上がるんだ。金持ちになるんだ。お前らとは違うんだよ。…。ごめん。こんなはずじゃなかったんだけど。…それじゃ。

ユウジは走り去る。

年子　死ぬも地獄、生きるも地獄、だね。じゃ、私も行くわ。
美奈子　元気でね、年子さん。
年子　うん。美奈子さんも。
絹江　もしものときは連絡するからさ。いいとこ紹介してよね。
年子　…待ってないわ、そんな連絡。

年子は行ってしまう。
２人きりになる。

美奈子　行っちゃったね。みんな。
絹江　…子どもの頃には想像もつかなかったな。こんなことになるなんて。
美奈子　そうね。
絹江　おはぎ、お彼岸にはお祖母ちゃんとお母さんが必ず作ってくれてさ。おいしかったな。粒餡でね。あたしは漉し餡より、断然粒餡。
美奈子　私も粒餡ね。大好き。うちでも作ったわ。お手伝いもして。
絹江　あたしだってお手伝いしたのよ、こう見えても。
美奈子　つまみ食いして怒られたり？
絹江　当たり。
美奈子　…なんの心配もなく笑ってたわね。あの頃は。心から。
絹江　…あたしだって。
美奈子　…恐い。
絹江　…うん。ねえ、あんたやっぱり一人で生きていきなよ。あたしはいいからさ。所詮、他人なんだよ、あんたとあたしは。
美奈子　やめてよ。そんなこと言わないで。
絹江　だけど、あんた笑えないよ、これからも。あたしみたいなのと一緒にいたら。

美奈子　一緒にいるのはあなたのためじゃないわ。私のため。
絹江　あんたの足引っ張るよ、あたしは。
美奈子　馬鹿！　私はあなたといるから生きられるのよ。
絹江　…嘘だよ、そんなの。
美奈子　絹江さん、怒らないで聞いてね。あなたはいつまた薬に手を出すかわからない。それに、いつ赤線に行ってしまうかもわからない。でもそれは、あなたが生きたいと思っているから。違う？
絹江　…。
美奈子　あなたの生きたい思いがわかるから、私は生きられるの。いい？　あなたには私がいなければってことじゃないのよ。うまく言えないけど、生かされている気がするの。あなたに。
絹江　…なにそれ？
美奈子　この手紙もそう。（手紙を出す）覚えてる？　私の読んでいた手紙。特攻で死んだ夫からの手紙。綺麗事を並べた最期の手紙。嘘っぱちよ、こんなの。どんなに死にたくなかったか。でも、これを読むたびに力が湧いてくるのよ。なんだかわからないけど、力が湧く。死んではいけない。私は生きて、生きて、どんな境遇になっても生きて、たとえ希望がなくっても生きて、ひどい目にあった夫を生かし続けなきゃいけないって。そういう力が湧いてくるの。…わかるかな、これ。生かされているの、私は。夫の手紙に。今はあなたにも。あなたが生きたいって思えば思うほど。手紙から夫の生きたいって思いがわかればわかるほど。私は生かされているの。
絹江　…。ありがと。とにかく、あたしはあんたの役に立っているってことね。
美奈子　（頷く）。…小茂田さんもそうだったのかな。
絹江　え？
美奈子　白樺派。あきらめちゃった人たちだって、本当は生きたかったと思うの。生きたかったのだけど、できないことがわかっちゃったのよ。その思いがわかるから、白樺派って綺麗な名前がつけられたのだわ。その思いがわかるから、必死で生きて、帰って来られたのだと思う。
絹江　…小茂田さんも生かされていたのかな、白樺派の人たちに。
美奈子　うん。きっとそう。
絹江　でも、あたしは白樺派になるかもなあ。希望がないなかで生きるなんてできないかもしれない。

美奈子　…本当に、恐い。
絹江　運かもしれないね。
美奈子　え？
絹江　運が良ければ、白樺派にならずにすむのかもしれない。
美奈子　運なのかな…。

沈黙。

美奈子　…作ろうか、おはぎ。
絹江　うん。あたしもやるよ。
美奈子　大丈夫？
絹江　もっと役に立ちたいよ、あんたの。
美奈子　うん。
絹江　あんたが笑うところを見たいしね。心から笑うところを。
美奈子　ありがとう。
絹江　あたしも生かされている、あんたに。
美奈子　…これから２人ね。
絹江　うん。２人っきり。

丹羽が走ってくる。

丹羽　おーい、きみ達！
美奈子　丹羽さん。
丹羽　いや、まだいてくれたか、きみ達。これは助かった。
美奈子　どうなさったのですか？

丹羽　他の人たちは？　みんないるのかい？
美奈子　年子さんと文子さんならもう駅に向かいました。今しがた。
丹羽　そうか。やはり急がないとな。では、ともかく単刀直入に。肝心なのは、きみだ。
美奈子　私？
丹羽　そう。きみ、店をもたないか？
美奈子　え？
丹羽　この、サロン貴婦人を経営してみないかと言っているんだ。
美奈子　あの、それはどういう…
丹羽　ともかく、ここは私が買い取ったのだよ。いろいろ考えて、そうするのが一番いい。ただ、切り盛りする人がいない。そこで、きみだ。勇ましいきみならできる。細かいことは追々教えるから、どうだい？　やってみないか？
美奈子　あの…
丹羽　ん？
美奈子　急にそんなことを言われましても。
丹羽　時間がないんだ。信用してくれ。
絹江　あたしらを利用する気じゃないだろうね。
丹羽　馬鹿を言っちゃいかんよ。以前のように借金できみらを縛ったりしない。それに、売春は禁止だ。売春はなし。まあ、本当に自由恋愛ということなら…いやいや、それは外でやってくれ。ともかく売春はなしだ。合法的にやる。どうだい？

顔を見合わせる美奈子と絹江。

丹羽　早く答えなさい。やってくれるなら今夜からでも営業だ。駅に行った者達も呼び戻してくる。
美奈子　そんなに急いで…
丹羽　当たり前だ。金を稼ぐのにボヤボヤしてちゃいかん。時は金なりだよ。
美奈子　でも、それだけじゃお答えできませんわ。
丹羽　きみ！

美奈子　ここを買い取った理由を教えてください。
丹羽　うーむ、さすがだね、きみは。勇ましくて、用心深い。ますます経営者向きだ。
美奈子　なぜですの？
丹羽　…妹さんが帰って来られるようにしておかなきゃならない。
美奈子　なぜ？
丹羽　なぜ…。それも言わなけりゃならないか？
絹江　帳簿。帳簿だね？　和子さんが隠した帳簿を探すんだ。
美奈子　ああ。それでは滅多なことはできませんわね、丹羽さん。
丹羽　…まあ、そういうことだ。あれがこの世にあると思うと夜も眠れず…
絹江　あは。
丹羽　し、しかし、それはきみらには関係ないことだ。きみらにとってはいい話でしかない。どうだい、やってくれるかい？
絹江　どうする？
美奈子　どうしましょう？
丹羽　早く。もてあそぶのはお客だけにしてくれ。彼女らが汽車に乗る前に呼び戻さないと。
美奈子　わかりました。
丹羽　…やってくれるね？
美奈子　（慇懃に）お引き受けいたします。
丹羽　よし。ありがとう。では、詳しい話は後だ。とにかく駅に行ってくる。待っててくれ。

丹羽は駆け出して行く。
美奈子と絹江は顔を見合わせ、大笑いする。

絹江　なによ、これ？
美奈子　心配してたのが馬鹿みたい。
絹江　働ける。ちゃんと働けるのね。

美奈子　ええ、働くわよ。
絹江　希望ができた。
美奈子　希望ができた。

再び笑う。

美奈子　あ、わかった。
絹江　なに？
美奈子　運の良し悪しじゃないのよ、やっぱり。
絹江　え、運良かったじゃない。
美奈子　それは後から、今こうなって初めてわかったことでしょ。運が良かったって。だったら、前もって考えてもしょうがないのよ、そんなこと。
絹江　後付けだから？
美奈子　そう。だって、希望は待っているのよ、いつも。私たちを。私たちが生かされているのなら。
絹江　え？
美奈子　今がどうであっても、生かされているって感じるのなら、希望はちゃんと待っててくれているの。
絹江　そうなのかなあ。
美奈子　そうよ。絶対だわ。希望はちゃんと待っててくれている。私は生かされているから。あなたにも。
絹江　…うん。なんだかわからないけど、そういうことにしときましょうか。
美奈子　意地悪ねえ、絹江さん。

笑う。

絹江　私たち、やっぱり同じ匂いだね。
美奈子　え？

絹江　深刻ぶってもどこか適当なのよ。
美奈子　あら、楽観的って言ってちょうだい。
絹江　あはは。元気が出てきた。作ろうよ、おはぎ。
美奈子　そうね。おはぎでみんなを迎えよう。戻ってくるのよ、みんなが。
絹江　働ける。ちゃんと。
美奈子　新しい出発ね。
絹江　行こう。
美奈子　よし。ほら、つかまって。

笑いあい支えあいながら建物に入っていく２人。
静寂が少し。

美奈子　やったー！
２人　粒餡――！！

フィナーレ

音楽が鳴る。
踊りながら出てくる女性達。
男性も出てきて、一緒に踊る。
音楽が終わり、全員がシルエットとなる。

終演。